

公開講演

「難民保護と帰還を再考する～

ルワンダ虐殺後、なぜ難民は帰還しないのか？」

2019年2月27日（水）



主催：立教大学 21 世紀社会デザイン研究科・科学研究基盤（B）
「人間の安全保障から考える難民保護と帰還の課題：世界に拡散したルワンダ難民の事例」
（2016～2019 年）

公開講演のプログラム

第一部：「難民保護、帰還、人道支援について再考する～難民研究の母・バーバラさんのレガシーを受け継いで」

- 1) ドキュメンタリー“Barbara Harrell-Bond: A life not ordinary” 上映会
- 2) ハレル・ボンド氏のレガシーに関するトーク：小泉康一、高橋宗瑠、ジュディ・レヴァー、米川正子

2017 年末現在、紛争や暴力、迫害により、世界で移動を強いられた人の数は 5 年連続で増加し、第二次世界大戦以来、最も多い 6850 万人に達しました。大量難民の動きに伴って、日本においても難民への関心は高まりましたが、難民問題の本質は十分に理解されているとは言えません。難民はどのような問題に直面し、また国際社会に何を求めているのでしょうか。その理解を深めるために、1982 年に世界で初めて大学に難民研究所を創設し、難民研究に幅広く貢献した英オックスフォード大学名誉教授の故バーバラ・ハレル・ボンド氏 (Barbara Harrell Bond) のレガシー (特に、難民保護、帰還と人道支援の教訓) を再考しました。

第二部：「なぜ虐殺後、ルワンダ難民は帰還しないのか？～1994 年の虐殺と戦争犯罪を検証する」

- 1) 講演：ジュディ・レヴァー (90 分、逐次通訳を含む)
- 2) 討論：杉木明子、高橋宗瑠、米川正子
- 3) 質疑応答

1994 年に起きたルワンダ虐殺から、今年 2019 年でちょうど 25 年が経ちました。ルワンダは経済開発や先見性のあるリーダーシップのモデルとして称賛されています。その一方で、虐殺中、またその後、国外に逃亡した多くの難民が未だに帰還していません。国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) が積極的に帰還を促進しているにもかかわらずです。なぜ帰還しないのでしょうか。

カナダ人ジャーナリストのジュディ・レヴァー (Judi Rever) 氏は、難民とその他 200 人への聞き取り調査と、虐殺の加害者を起訴したルワンダ国際刑事裁判所 (ICTR) の機密文書をもとに、難民の帰還を妨げている主な要因である、虐殺前・中・後に起きたことを話しました。と同時に、庇護申請者の法的保護のアドボカシー活動を通して、ルワンダ人を含む多くの難民を救ったハレル・ボンド氏のレガシーを再検討しました。

公開講演会の開催趣旨

米川正子（立教大学特定課題研究員）

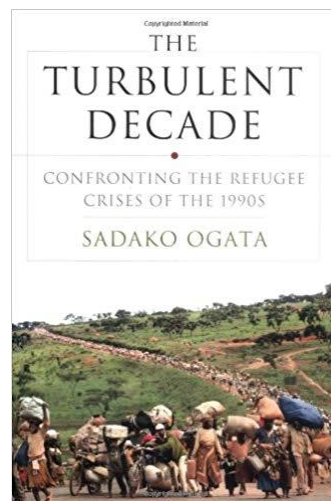
本講演会は、主催の科学研究基盤（科研）「人間の安全保障から考える難民保護と帰還の課題：世界に拡散したルワンダ難民の事例」(2016～2019年)の最終報告会という位置付けになります。私とその代表を務め、分担者と協力者12名の中に、バーバラ・ハレル＝ボンド氏、ジュディ・レバー氏などが含まれています。

バーバラとの出会いは、2014年、ウガンダでルワンダ難民などの調査した際に、あるNGOを通じてメールでつながったのがきっかけでした。同年、ルワンダ難民の現状について相談するためにバーバラが在住するオックスフォードに行きました。それ以降、年に1、2回オックスフォードでバーバラと議論し、メールでも毎週のように意見交換をしているうちに、ジュディや他のルワンダ難民ともつながることができました。特にメールで、バーバラ、ジュディともう一人のルワンダ人と議論する過程でさまざまな疑問が浮かび上がり、それを明白にするために研究を進める意義を痛感し、科研に申請しました。まさにバーバラのおかげで、内容の濃い研究ができたと自負しており、感謝しています。

私のメンターであったバーバラが2018年7月11日に亡くなったことは、私にとって大きなロスでした。自分がバーバラのために何ができるのか問いかけたときに思いついたのが、彼女のドキュメンタリー映画上映会と関係者とのトークを開催することで、彼女のレガシーを特に学生や若い世代と共有することでした。近年、難民への関心が再び高まっているものの、難民問題の本質が十分に理解されているとは言えません。また学生から難民のために何かしたいけど何をすればいいのかわからないという相談を受けます。大学とは考える場であり、固定観念、また常識を破ることが必要です。これはまさにバーバラが言ってきたことであり、そういった場をつくりたいと思い、本公開講演を開催いたしました。

なぜルワンダ難民の事例を使って難民保護と帰還について検証したのか。それは私の前職と関係しており、1995年から1998年にかけてルワンダでUNHCR職員

として働いていた際に、大きな事件が起きました。1996年、コンゴ民主共和国（以下、コンゴ）からのルワンダ難民の大量帰還です。正確に言いますと、自主的に帰還ではなく、強制帰還でした。



その大量帰還の写真は、当時の国連難民高等弁務官（UNHCR）の緒方貞子氏の自著 *Turbulent Decade* の表紙にも使用されました。著書には1990年代に起きた世界の難民オペレーションについて解説されており、ルワンダ難民の大量帰還はまさに同年代を代表する事件でした。当時、さまざまな団体から批判されました。

実は、難民全員がルワンダに帰還したわけではありません。難民の一部はコンゴ東部からコンゴ西部、そして周辺国に逃亡し、その後、アフリカ諸国、あるいは北米、ヨーロッパに拡散しました。

帰還を拒否してきた難民に対して UNHCR とルワンダ政府は1994年の虐殺以降、常に難民に帰還を促進してきました。まず1994年虐殺直後に難民の帰還を軽く促し、2002年から帰還を奨励（強く促進）するようになり、2013年、ルワンダ難民の難民地位の終了条項の適用に伴い、難民地位を剥奪しました。言い換えると、難民が庇護国で現地統合できない場合、彼らは母国への帰還が義務化されることとなります。

1994年以降今日まで、ほとんどのルワンダ難民は帰還

していません。帰還しても、再び国外への避難が過去 20 年間繰り返されました。私はその動向を追い続け、なぜ 2013 年に難民地位の終了条項が適用されたのかと疑問を抱いてきました。

こうした研究を進めるうちに、難民が帰還しないいくつかの要因の中に、1994 年とその前後に起きたこととの関係性が明白になりました。そしてその問題は、ルワンダ、あるいはアフリカだけに限定せず、虐殺・難民の定義、平和構築、国連組織、人権、資源問題など問い直す必要性があることがわかりました。

その問題の理解度を深めるために、この度ジュディに基調講演をお願いしました。著書の *In Praise of Blood* などから、私を含む世界の多くの人々が衝撃を受けました。勇敢で、信頼性が高く、また難民に常に寄り添ってきたジ

ュディをカナダから招聘できたことは大変名誉なことです。

参加者のアンケートによると、多くの方が、バーバラの実績やルワンダ難民の現状だけでなく、難民の保護や帰還、またルワンダ虐殺の真相、ルワンダ政府の現状、国連の責任について学んだことがわかりました。これらの問題の理解度を深めるためにも、本公開講演会の報告書がその普及の手助けとなり、また当日の参加者にとっても講演会の内容を再確認するきっかけとなれば幸いです。



ドキュメンタリー“Barbara Harrell-Bond: A life not ordinary” 上映会

バーバラ・ハレル・ボンド氏の生い立ちと実績

1932年米国サウスダコタ州生まれ。ケンタッキー州のアスバリー大学で音楽を専攻するが、結婚のために中退。渡英し、オックスフォード大学で人類学を学ぶ。1967年、'Blackbird Leys: A pilot study of an urban housing estate' で修士号を、1971年に'Marriage among the professional group in Sierra Leone' で博士号を取得。法律人類学者。

1960-70年代はシエラレオネの法律を研究していたが、1982年から始めたアルジェリアとスーダン（南部）でのフィールドワークが、強制移住や難民の司法的支援に関心を寄せるきっかけに。スーダン（南部）におけるウガンダ難民への緊急援助の研究をまとめ、1986年 *Imposing Aid: Emergency Assistance to Refugees* (Oxford Univ Press, 『押しつけ援助』) を出版、人道援助スキームを痛烈に批判した。

どのように人道支援機関の援助の質を向上させるかという問いに向きあったアルジェリア（サハラウイ難民）でのフィールドワークを通じ、この分野における研究知見が乏しいことに気づき、1982年にオックスフォード大学にて世界初の難民研究所を創設し、所長に就任。

さらに、新しい研究分野で、読者層も少なかった1980年代に、難民研究の論文ジャーナルの出版を渋るオックスフォード大学出版社を説得。1988年、難民や強制移住についての研究ジャーナル *Journal of Refugee Studies*、*Forced Migration Review* 論文雑誌を発行。Berghahn book series とともに難民研究所の3大柱として、難民研究の拡大に重要な役割

を果たした。1996年、アメリカ人類学学会から特別功労賞 (Distinguished Service Award) を受賞。

1996年、難民研究所を退職。1999年、ウガンダのマケレレ大学に Refugee Law Project、2000年から2008年にかけて、カイロ・アメリカン大学客員特任教授を務め、難民学の大学院コース (Forced Migration and Refugee Studies Program, Africa Middle East Refugee Assistance) を新設。難民の法的支援を進めるとともに、学生が難民法を学ぶ仕組みをつくり、難民へのインタビュー、証言のとり方、立論、研究の指導を行う。2007年に定められたナイロビ・コード (難民事件における法的支援提供者のための倫理に関するモデル規則) にも関わる。

ケニア及びウガンダにおいて、亡命中の難民の権利に関する研究を *Rights in Exile: Janus-Face Humanitarianism* (Berghahn Books、2005年) にまとめた。2005年、難民研究分野への貢献が評価され、OBE (Order of the British Empire、大英帝国勲章) を受賞。

2008年にオックスフォードに戻り。難民の法的支援を世界的運動へと発展させるために、Fahamu Trust という NGO のディレクターとして、南半球の難民の法的支援に携わる弁護士のための情報収集サイト Rights in Exile という情報プラットフォームの設立・運営。

ルワンダ難民の終了条項の適用に関する意見交換を目的に、専門家や難民などとネットワークも築いた。

参考資料：ハレル・ボンドの履歴書 & <http://www.refugeelaidinformation.org/>

第1部：バーバラ・ハレル＝ボンド氏のレガシーに関する各討論者のコメント



小泉康一（こいずみ こういち）：大東文化大学教授。東京外国語大学大学院修士課程修了。UNHCR 元職員（タイ）。英オックスフォード大学難民研究センター客員研究員、ジュネーブ大学国際関係高等研究所客員研究員。専門は難民・強制移動民研究。主著に、『国際強制移動の政治社会学』、『グローバリゼーションと国際強制移動』（共に勁草書房）、『国際強制移動とグローバル・ガバナンス』（御茶の水書房）、『グローバル・イシュー：都市難民』（ナカニシヤ出版）。

私は「難民・強制移動民」の研究をしております。難民と強制移動民というふうに並べてお話いたしますが、難民はあくまでも強制移動民の一部だということであり、そのメインの部分だとお考えください。

私は1970年代から1980年代の初めに、タイの難民キャンプでUNHCRの職員として働いた経験があります。その中で、難民を助けるということは非常に重要なことなのですが、この問題を全体的に理解したいと思い、英オックスフォード大学の難民研究所（当時は難民研究プログラム）で研究をいたしました。バーバラ先生にお会いしたのは1990年のことで、私が日本人第一号でした。その時以来、私は先生と、2018年7月にお亡くなりになるまで、互いに連絡を取り合っていました。

先生の学問的な遺産に関して述べる前に、当時の世界の難民研究の状況をお話します。難民研究は、1970年代そして1980年代と、世界では非常に盛んになり、劇的に拡大しました。そして、NGO等の方々に参加する人道主義の援助事業が大きな「成長産業」となり、世界の多くの場所で、大勢のNGOが活動することになりました。

そうした中で、バーバラ先生の著書 *Imposing Aid*（「押しつけ援助」）が1986年に出版された時に、ある著名な人類学者が、「これから多くのことが起きる先触れではないか」と述べたことを印象深く覚えています。

この本は、国際援助が一層盛んになる中で、その現場で援助の在り方を実際に検証した、画期的な研究でした。この本が出版された1986年までは、難民、つまり「人が

避難する」という研究は、まだ新しいものでした。

そして、その内容ですが、1980年代のスーダン南部という特定の時期と特定の場所の事例研究として、非常に特色を持っておりました。この点を煎じ詰めて、アプローチで考えてみると、三つの大きな特徴がありました。

1つ目は、歴史的視点の導入です。通常の援助では、援助関係者がどう助けたか、どういうふうに物資を投入したかといった点が、重要になるでしょう。しかし歴史的にこの問題がどう起こってきたかという、その経過が重要なポイントとして上がってきません。バーバラ先生の本は、歴史的に事柄をきちんと掘り下げたという点に特徴がありました。

2つ目は、事例を扱っていながら、本質的には世界各地の事例と比べるという、比較の目を持っていたということです。比較研究が、非常に重要な点でした。

3つ目は、視点が批判的だったことです。この指摘により、バーバラ先生は援助関係者からは非常に嫌がられました。少なくとも批判的であったことが非常に重要な点です。つまり、国連やNGOの現場からの報告書を全くのみにしてしまうことに対して、警鐘を鳴らしました。

それまで研究者、特に人類学者は、UNHCRが難民と「公式的に定義をした人たち」だけに焦点を合わせていました。そして彼ら研究者は、難民が収容されている難民キャンプに行って、あるいは受け入れ国政府が、難民定住地として設定した荒地の場所へ行って、インタビューを行って、そして調査をして難民の状況を報告するというやり方が一般的でした。

そういったやり方をすると、難民キャンプを嫌がり、キャン

プの外に住んでいる人たちは、全く難民と認められないこととなります。そういった人たちの状況は、全く無視されてしまうこととなります。

一方、難民キャンプの中で生活する難民は、しばしば深刻な人権侵害にさらされます。移動は、当然のことながら難民キャンプの中に制限され、生活は束縛されます。性的な暴行は日常茶飯事です。そして、亡命生活が長引けば長引くほど、個人の貴重な時間は失われていきます。子どもたちには全く教育が行われず、NGO の教育面での活動は善意なのですが、教え方が体系的ではないため、職業や技術を獲得するチャンスは、かなり難しいこととなります。

難民キャンプは、難民が避難をする場所、そして人道的な解決がなされる場所だと一般的には捉えられていますが、実際には受け入れ国政府や国際機関の交渉や思惑により、政治的に物事が取り決められる場所、対象となります。つまりキャンプは、難民の福祉が受け入れ国の責任ではなく、国際社会がその責任を引き受けるようにするための、一つのショーウインドーと言えます。

バーバラ先生は、人を互いに結び付けるものは、「社会的な絆」だと言います。援助計画の点で彼女が批判したのは、援助を受ける難民が欲しいと思っているもの考えることなく、人間というより、単に生物としての物理的な要求を満たせばいい、という援助側の考え方そのものでした。

難民も社会の一員であるため、社会の一員として生きていくためには、互いの助け合いといった、社会的なつながりや、そうした行動が期待されるのは当然のことです。しかしキャンプの中で、難民は物の交換やお葬式等の儀式といった、社会生活、人間が誰も保障されうる基本的な振る舞いをするのが非常に規制されるような状況にありました。

本書の強いメッセージは、人間にお互いの信頼関係が崩れ、単に見ず知らずの人々が寄り集まった中で、換言すれば、共同体の感覚が全く崩壊していく極限的に否定的な状況の中で、受け入れ国政府や国際援助機関がどのように働き、あるいはどう働かなかったのかを注意深く検証し、情報を集め、記録したという点にありました。

バーバラ先生の批判に対して、国連を含めた国際人道

機関側は、どのように考え、対応したでしょうか。曰く、目的が「人を助ける」という高貴なものであれば、実際の援助の実態に対して、厳密な調査は必要ない、ということでした。彼らは、自分たちの行動や結果は、詳細な検証からは除外されるべきだ、と言ったのです。しかしバーバラ先生は、人道計画は人間を扱う限り、経済開発、ODA などで行われるのと同じような厳密さで、援助計画は評価されるべきだ、と言いました。

そしてバーバラ先生が忘れなかったことは、1980 年代初め、スーダン南部での調査で出会った難民たちは、トラウマになるような恐ろしい経験をしていたことでした。私たちは難民を十把ひとからげで、難民は皆同じ犠牲者だと考えるかもしれません。しかし彼女は、一つのやり方で全てをまかなってしまうという援助を拒否しました。難民は非常に幻滅した状況にあり、周囲からの冷笑が渦巻く中で、一人の人間として、自己の生存と生活の向上を戦っていく一人の行為者であると考えました。そして、その中で「新しいアイデンティティ」が社会的にどう作られるかを示したのです。

バーバラ先生は、ある状況の下では、人は人として愛すべき状況にはない、と言います。難民自身が、強い猜疑心を持ち、助けられているにも関わらず相手に敬意を払おうとせず、邪険に振る舞うことがあります。彼女は、彼らがなぜそのように邪険に振る舞うのかを理解する必要があると言います。こうした難民特有の境遇を理解することが、難民自身と私たち援助側には求められています。援助側の相対的な善意のみでは、難民の行動に対処できない、と彼女は言います。

援助側は、自分たちが決めた定義に従って人々を分類して、そして自分が関心を持つ集団に対して援助を行いますが、それは政策担当者や NGO 等の活動者が、難民の状況を改善するのは自分たちだという考えを前提としているからだと思います。これは危険な仮定です。援助の上で、「援助者 対 被援助者」という二項対立で考えてしまうと、いわゆる「難民問題」になってしまいます。難民問題に限ってしまうと、彼らの人としての生活側面が見えなくなります。

つまり、難民を助ける（福祉）といったふうに、目的を、

あらかじめ助けるという一点に限定してしまうと、考え方に枠がはめられてしまいます。こうした制約された見方から、私たち自身の考え方が、どう自由になれるのかが非常に

重要な点です。人々の「社会世界」を理解することの重要性を、バーバラ先生は私たちに教えてくれようと思いません。



高橋宗瑠（たかはし そうる）：立教大学兼任講師。2019年4月より大阪女学院大学教授。アムネスティ・インターナショナル日本支部及び国際事務局（ロンドン）、国連のジュネーブやウィーンで勤務。国連人権高等弁務官事務所パレスチナ元副代表。英オックスフォード大学大学院難民研究センターフェロー、英エセックス大にて法学修士号（国際人権法）取得。主著に『パレスチナ人は苦しみ続ける：なぜ国連で解決できないのか』（現代人文社）、『コンセプトとしての人権』（監訳、現代人文社）。

僕は日本のアムネスティ・インターナショナルで難民の担当した後、オックスフォードに1年間留学し、バーバラの下で学びました。その後、アムネスティ・インターナショナルの本部である国際事務局で難民の審査に携わりました。日本で難民の支援をした時にあった疑問やわだかまりをバーバラの下で学ぶことによってより体系的に理解しました。研究中に、難民の支援者の行動のおかしさなどを学び、自分たちは専門家であり自分たちの方が状況を分かっているのだという、陥りがちなそういう罠。そういう考えがいかにおかしいかということをおかしさをバーバラに教えていただいたと考えます。

ドキュメンタリー映画にもあった難民主体、難民自身の視点ということの大切さをバーバラはずっと訴えたわけです。

それを分かりやすく伝えるための一つの思い出話があります。ロンドンにおいてソマリア人難民がなぜイギリス社会に溶け込めないのか、同化していないのかに関する会議があり、バーバラと一緒に参加しました。

パネルにはイギリス内務省もイギリスの著名な研究者がいました。イギリスの政府の役人や同化支援の専門家、エキスパートたちが集まりプレゼンテーションをしていました。各パネリストは、ソマリア難民がなぜイギリスに溶け込めないのは彼ら自身の問題ではなく、まずわれわれ自身がより手をさしのべる必要があるのだという話をしました。

質疑応答でバーバラが、そもそもソマリア人難民自身

が同化したくないかもしれないと考えたことはないのかといきなり突きつけました。そしてパネルにはソマリア人が一人もいないが、ソマリア人の意見を聞いたのかとバーバラが荒く述べると、会場は静まりかえりました。

僕がイギリスにいた1995年時点でもそのような感じでした。エキスパートだけの意見で、難民にとって何が 필요한のか、勝手に決めつけてしまう援助事業という状態がまかり通っていました。今でももちろんまかり通っていると思います。それがおかしいと気付かせてくれたのがバーバラだと思います。難民を研究したり、支援したりする人の中でそれをずっと声高に、一番最初から主張し続けてきたのがまさにバーバラです。

今でも僕の学生で、難民という「かわいそうな人たち」を助ける仕事に就くのはどうすればいいのか、また国連で世界の恵まれていない人をどう助けることができるのかといった相談をよく受けます。善意を持っていること自体は悪いことではないため、あまり水を差すようなことは言いたくありませんが、一方的にこっちが助けてやるという考えでそういう仕事に就くと、絶対いいことはないので考え直してからそういう仕事を探したほうが良いと言います。

バーバラのおかげで僕も気付かされました。僕にとってのバーバラのレガシーは、僕が気付かされたことも含めて今の若い人や難民業界で働く人にも伝えることだと思います。



ジュディ・レヴァー：フリージャーナリスト。Radio France Internationale、AFP で勤務し、アフリカと中東から報道。著書は *In Praise of Blood: The Crimes of the Rwandan Patriotic Front* (Random House Canada 2018 年) 世界の難民の法的保護を促進する団体「Rights in Exile Programme」のルワンダに関する出身国情報専門家。 *Globe and Mail* (カナダ)、 *Le Monde Diplomatique* (仏)、 *Foreign Policy Journal*, *Digital Journal*, *The Africa Report* 等に寄稿。

バーバラは非常に多くの人にインスピレーションを与えた存在だったと思います。私もその一人であり、バーバラの難民の権利に関する研究、そして貢献は非常に大きなものがあつたと思います。多くの人がそれによって影響されました。多くの人がそれによって心を動かされました。そして、何よりも重要だったのは、私どもに対して、法的な保護を難民たちは必要としている、それは難民たちの権利であるという、新しい側面を教えてくれたことだったと思います。

バーバラの研究は非常に広範な分野にわたって詳細な研究をされておりました。そして何よりも、具体的な事例を示すことによって、誰でも理解できるような研究の方法を取っていたと思います。例えば、アメリカが難民の子どもを強制送還することは、国際法である子どもの権利条約に違反しているということを、具体例を示してわれわれに教えてくれました。このような国際法の違反は今でも頻繁に行われており、30 年前にバーバラがおっしゃったことは今でも意味のあることだと思っています。

そして、いろいろな政治的判断の間違いをわれわれは理解することができますが、なぜそのような間違いが起こっているのか、そしてそれが具体的にどのように国際法に違反しているのかをバーバラ先生は教えてくださいました。例えば UNHCR が難民に対する終了条項の適用を推奨することは国際法の違反だということを示してくれました。

バーバラは多くのフィールドスタディーを行っておりました。私も個人的にフィールドスタディーに非常に興味がありますが、ウガンダで難民保護プロジェクトを立ち上げました。この難民保護プロジェクトでは、亡命を申請している難民申請者にエンパワーしただけではなく、ウガンダに在住するルワンダの難民が置かれている悲惨な状況に対する理解を深めてくれました。また、ウガンダにおける広範な証言、

聞き取り調査の結果を集めまして、その記録を残したことは非常に重要な財産になっています。

バーバラのもう一つの功績は、研究者に対し、また前線で難民が直面している問題取材しているわれわれジャーナリストに対し、批判精神を持つことが非常に重要ではないかということを知ってくれたことです。

また、バーバラは、言葉だけではなく理論だけではなく、行動の人だと思っています。彼女がいかに広範なフィールドワークをしたかということによってそれが示されていると思います。

彼女は、大学の研究室で研究をするだけでなく、本当に現場に行き人となることが重要だと考えておりました。そして、彼女の自宅は多くの人にとっての聖域、実際もそこに行き安心できる場所となっていました。実は、私はバーバラと知り合った当時、ルワンダの現政権が過去に起こした、あるいは現在起こしている犯罪に関する調査・取材をしておりました。常に身の危険を感じている中、バーバラは私と家族を自宅に招待してくださいました。このような親切を受けたことは初めてだったので、大変感激しました。

バーバラの手法は二つあると思います。一つはフィールドワーク、もう一つは聞き取り調査。このアプローチは彼女が育てた多くの学生が引き継いでおり、彼女の意思は今後もそういった若い世代によって引き続き伝えられていくことだと思っています。

バーバラは米川先生を非常にかわいがり、米川先生の仕事に敬意を払っておりました。米川先生はバーバラ先生と同じようなアプローチをされていると思います。まず、聞き取り調査を重要視していたこと、それをきちんと分析し、その結果、政策のレビューにつなげていく、そういうやり方だったと思います。米川先生の研究は、この分野に非常に

大きな貢献をしていると思います。

バーバラ先生は私を、世界の難民の法的保護を促進する団体、Rights in Exile Program に誘ってください、ルワンダに関する出身国情報の専門家としてお手伝いす

ることになりました。私のお手伝いは、主にルワンダ難民に対して司法的な専門性の側面アドバイスすることでした。

私の提言が少しでも皆さまのお役に立つことを祈っております。



米川正子（よねかわ まさこ）：立教大学特定課題研究員。2019年4月より筑波学院大学准教授。国連ボランティアでカンボジア、ルワンダ、ソマリアなどで活動。UNHCR 職員でルワンダ、ケニア、ジュネーブに勤務。コンゴ民主共和国ゴマ UNHCR 元所長。南アフリカ・ケープタウン大学大学院で修士号取得（国際関係）。主著に『あやつられる難民—政府、国連、NGO のはざままで』（ちくま新書、2017年）『ルワンダ・ジェノサイド生存者の証言—憎しみから赦しと和解へ』（訳、2015年、有斐閣）。

簡潔に、バーバラさんの著書 *Imposing Aid*（『押しつけ援助』）の重要性について強調したいと思います。

本書は1986年に出版されました。そして1999年に別の著者による *Do No Harm* という著書が出版された際にベストセラーになり、その日本語訳『諸刃の援助—紛争地での援助の二面性』（明石書店、大平剛訳）も出版されました。この *Do No Harm* が人道支援を批判した最初の本だと勘違いされている方もいますが、そうではなく、バーバラさんの著書が最初です。

これがなぜ重要なのかと言いますと、いわゆる「人道援助産業」は1990年以後発展し UNHCR や NGO の

職員数が増え、そしてメディアの注目も浴びるようになりました。その前の1980年代はまだそこまで発展しおらず、その頃に出版されたバーバラさんの著書は先見の明があったことを意味しています。ただ、あまりにも出版が早過ぎたためにおそらく読者がついていくことができず、そして日本語にも訳されなかったのだと思います。

またバーバラさんのもう1冊の著書 *Rights in Exile* も UNHCR や NGO などを批判しており、私も授業で参考文献として使っています。難民保護や人道支援に関心がある方に強くお勧めします。



第 2 部：講演会「なぜ虐殺後、ルワンダ難民は帰還しないのか？」

～1994 年の虐殺と戦争犯罪を検証する～

ジュディ・レヴァー氏

本日は立教大学で講演することができ、非常に光栄です。米川先生、そして立教大学の皆さまにお礼を申し上げますと思います。

通説を鵜呑みにする危険性

米川先生と私の研究は多くの面で相補的で、共に探求の精神でなるべく多くのルワンダ難民に聞き取り調査を実施しています。従来の想定を超えて、長年隠された真実の掘り起こしを目指しています。さまざまな主張が検証なしに、また事実的な根拠なしに繰り返され、その主張に疑問を抱いてきました。過去 30 年にわたってルワンダ難民の安全と尊厳に被害を及ぶまで、多くのナラティブが鵜呑みされ、理解されないまま繰り返されてきました。アフリカ中央部の痛ましい歴史が、どのように、なぜ起きたのかをより理解するために調査してきました。欧米諸国が今までとってきた政策の間違いを明らかにし、理解する必要が最も重要です。

ルワンダ虐殺に関する通説は、ルワンダ愛国戦線（RPF、ルワンダ現政権）が一方的につくり上げ、民族的側面が強いものです。片方が悪者で、もう片方は犠牲者という構造のせいで、（もう片方の犠牲者を）擁護できなくなっています。このナラティブのせいで、多くのルワンダ人とコンゴ人の運命が変わってしまいました。

私の調査の目的は、ルワンダで起こった虐殺を再検証することです。なぜそれが起きたのか、本当にツチだけが犠牲だったのか、フツはどうだったのか、十分に調査する必要があります。この虐殺を再検証することで、なぜ 1994 年とその後、国外に逃亡した大量のルワンダ人はいまだに帰還したがないのかという疑問の回答が明らかになります。

虐殺前・中・後に RPF がとった行為に関する証言をもとに RPF の犯罪歴を批判的に検証すると、RPF の偽りに関する行為能力が見えてきました。この行為能力をつなぎ合わせることで、帰還とルワンダ難民に関する国連の政策というパラダイムシフトを受け入れる必要があります。

虐殺の調査のきっかけ

虐殺を再検証しようと思ったきっかけは、私がまだ若いジャーナリストだった頃、人道危機が起きたコンゴに取材に行き、それが人生の転機となりました。1997 年 5 月、コンゴのモブツ政権が失脚し、カガメが率いるルワンダ政府軍と反政府勢力がコンゴに侵攻していました。当時、ルワンダ政府軍は既にコンゴの主要都市と戦略的地域であった森林（熱帯雨林）を支配していました。

その森林では、UNHCR、赤十字、国境なき医師団の職員が、行方不明になっていたルワンダのフツ難民の捜索・救助の活動をしており、私も同行しました。カガメのツチ兵士の攻撃によって犠牲になった生存者を探していた際に、じかに RPF の陰悪な顔を見ました。多くの生存者は病気、感染と飢えで苦しみ、死にそうな局面でした。彼らの苦悩と残虐に関する証言が頭から離れませんでした。

コンゴ北東部のキサンガニ市の南部で、キニャルワンダ語（ルワンダの母国語）を話すルワンダ政府軍が難民キャンプに攻勢をかけ、約 1 万人の犠牲が発生したと難民から聞きました。その襲撃の生存者で体力があった者は散り散りになりましたが、中には RPF に再び捉えられて、愛する者の死体を埋葬させられました。コンゴで起きた残虐行為はある程度知られていますが、現地で聞き取り調査をする過程で、不安になるような真実があることに気付いたのです。

私が知りたかったのは、そもそも虐殺の終焉後に、なぜ大多数のフツが国外に逃亡し、そしてなぜ彼らはコンゴ東部のキャンプに居続けて帰還しなかったのか。もしフツがツチを殺し、RPF が虐殺を止めたなら、—そして国際社会はルワンダを安全だと言っていた—、なぜ難民は帰還できないのか。

多くの難民が言うには、そもそも 1994 年にルワンダ国外に逃亡したのは、RPF が彼らの家族を殺戮し恐怖を抱いていたからでした。彼らがキャンプに居続けたのは、帰還を恐れていたからだ。それを聞いて驚き、疑いましたが、

多くの証言を組み合わせることで理解できるようになりました。

UNHCR は強制帰還を促進

また国連とルワンダ新政権に強制帰還された者の中に、その後行方不明になった者が多いと聞きました。そして最も悲劇的で矛盾だった出来事の一つは、強制帰還から逃れるために森林に逃亡し、そこで病気がかかった難民が多くいたことです。国連の外国人職員は、このような難民、そしてコンゴ人の家庭に養われたルワンダ人の孤児まで、ルワンダへの帰還を主張していました。それが国連の政策だったのです。

UNHCR と援助団体は、難民にとって帰還した方が安全だと述べましたが、難民は、ルワンダはもっと危険だと言っていました。難民は何が起きるかかわかっていました。最終的に、森林に逃げた難民は、食糧援助を与えられ、一時収容所（トランジットキャンプ）に送られて、航空機で国に送還されました。

しかし国連は、ルワンダ政府軍がコンゴで難民を追跡し殺戮した事実を十分に知っていました。そのため、殺戮を命令したルワンダの方が安全という国連の断言は、全然理にかなわなかったのです。ここで、UNHCR の最も悪名高い、倫理的と道徳的な矛盾に直面しました。自分の家族を殺した加害者がいる所に難民を帰還させることは、ルワンダ難民を保護する国連の任務において信頼を裏切る行為です。

国連の外国人職員は現地で起きたことを黙認していました。森林での攻撃に関しても、「難民に対する暴力」「災難」という受身で、曖昧な表現を使っていました。NGO 国境なき医師団が、20 万人の難民が森林で行方不明になり、殺された可能性があるという重大な報告書を公表したにもかかわらず、これに関して誰も現地で言及しませんでした。

私はルワンダに行き、一時収容所や村で聞き取り調査を行いました。難しい調査でしたが、何とか幾つかの事実を発見しました。まずフツが恐怖の中で暮らしていたこと、そしてツチ同様に、虐殺で家族を失い、悲みに浸っていたこと。また 1997 年にルワンダに帰還した人々は住む家がありませんでしたが、それは、ツチによってフツの家が占領さ

れたからです。UNHCR の現地代表もそれを認めました。

1997 年当時、ルワンダは非常に不安定な状況にあり、ルワンダ北西部における攻撃の黒幕は誰なのか不明でした。しかし時間が経過する中で、RPF が民族浄化作戦を展開していたことが明らかになりました。RPF が 1994 年に暴力を止め、「アフリカのルネッサンス」の最先端にいるという主張に疑問を抱いていましたが、コンゴでの取材後、それが不信に変わりました。

ここで明白にしたいことは、歴史学的に見て、そもそもアフリカ中央部にいたフツの難民がなぜルワンダから逃亡したのかに関して実証的な研究調査が欠如していたことです。またツチの離反者に対して、数年間、体系的な聞き取り調査が行われませんでした。実証的な研究がなかったことは、人権団体、NGO、国連、研究者とジャーナリストが犯した巨大な過ちです。これによって、暴力のメカニズムを解明することが困難になりました。

虐殺前・中・後に起きたこと

私はこの数年、何百人の犠牲者、直接的と間接的な証言者、カガメの軍隊の離反者に聞き取り調査をし、ICTR の弁護士と調査者からも話を聞きました。カガメの殺戮マシンの仕組み、暴力のメカニズム、RPF がどのように罪から逃れることができたのか、誰がなぜその罪を見逃しているのかを解明したかったのです。これらの証言と国連の機密文書を拙著 *In Praise of Blood* (『血の礼賛』) にまとめました。その結論を紹介します。

カガメと RPF が、ルワンダのジュベナル・ハビヤリマナ (Juvenal Habyarimana) とブルンジのシプリアン・ンタリヤミラ (Cyprien Ntaryamira) の両大統領が乗っていた航空機を撃墜したことで、虐殺に火がつきました。撃墜直後から、カガメの軍隊と高官全員が、フツ軍から奪い取った戦線の裏で動いていました。北部から始まって、機動部隊が機能していたのです。RPF は北部から東部に移動し、そこでフツのコミュニティ・リーダーらを狙い、その後、農民を殺害しました。RPF は、フツの農民に集会を呼びかけ、そこで一斉に殺戮・埋葬しました。時おり、インタラハムウェというフツの民兵に殺害されたツチと一緒に殺戮されることもありました。その他、トラックで遠方の森に連

れられ、焼却されたフツもいました。

ですから、この虐殺は二つの側面がありました。フツの支配地域ではツチに対する殺戮が、そして RPF の支配地域ではフツが殺されました。

当時、これを目撃したオブザーバーはいませんでした。が、このような殺戮があったことは国連もある程度把握しており、国連文書にもその一部が記録されています。RPF の罪が見逃されたのは、ICTR がそれを許可したからで、ルワンダの主な同盟国・アメリカがそう要請しました。ICTR は結局、これらの罪の責任者であるカガメも RPF 軍の幹部も起訴しませんでした。証拠を抹殺し、カガメの不処罰を強化したのです。

また拙著に、RPF のさまざまな局から構成されている特殊部隊(commando)が、首都キガリだけでなく、ルワンダ全各地でツチを直接的に殺したことも記しました。その結果、ツチの犠牲者が増え、感情的な非難が高まり、フツ政権と(フツ)市民が悪者扱いされました。

RPF がルワンダ各地における潜入(infiltration)作戦は、領土を占有するために重要でした。これで虐殺がどう展開したのかわかるでしょう。これは大統領機の撃墜以前から計画されていました。RPF は民兵のインテラハムウエだけでなく、政党の青年部や他の民兵にも潜入し、1994 年 2 月、著名なフツの政治家 2 名を殺しました。それをきっかけにブタレとキガリで大きな暴動が起き、37 名が亡くなりました。ブタレは虐殺前に、RPF によって大量に潜入されていたところでした。

また RPF はツチの民間人も利用し、彼らをキガリの RPF 本部(CND と呼ばれた)に招き、いわゆる第五部隊(fifth column)¹になりました。虐殺前に、RPF の軍事拠点が全国に約 600 あり、そのうちの 147 はキガリに集中していました(この数が RPF の潜入密度を示す)。

1990 年の侵攻

1990 年、RPF はルワンダ北部に侵攻した時の記録がほとんど残っていないため、当時の現地の状況を説明しま

す。RPF の創設者の一人(フルマ将軍)は、現地にいたイタリアとベルギーの神父と一緒に、恐ろしい実態について話してくれました。フルマによると、フツ住民を追い出すために、RPF は住民を殺戮し、財産を略奪し、農作物を破壊しました。RPF がルワンダ北部でフツを追放し、そこにツチ・ランド(ツチの土地)を築き、1960 年代にウガンダに亡命したツチの難民がそこに帰還したのです。また RPF は国内避難民キャンプを襲撃し、ロケット弾や迫撃砲とともに前進し続けました。

イタリア人の神父によると、RPF は、多くの子どもが遊んでいた場所に地雷を埋め込んだために、子どもたちが損傷を受けました。1993 年の終わりまで、数百万というフツが国内避難民になり、みすばらしいキャンプで生活を強いられました。キャンプの衛生状態は最悪で、多くの人が栄養不良に陥っていました。その結果、皮膚病、寄生虫による伝染病、結核、下痢、呼吸器官の疾患など、多くの人の健康状態が悪化しました。このような劣悪な状況の中、避難民キャンプが反ツチのフツ過激派が醸成する場所となったのです。

RPF の狙い

このような殺戮に関する RPF のねらいは何だったのか？フツの民間人を絶滅、あるいはフツの人口数を減少し、ツチの民族的優位性を確立することです。政府や軍の要職からフツを追い出し、それをツチによって取り換える。教師、アーティスト、ビジネスマン、そしてすべてのコミュニティ・リーダーを狙ったのは、フツの抵抗力を弱体化し、RPF が支配できるようにするためです。RPF は特に北部を一掃するように、軍に命令しました。それは、人口マップを変え、ウガンダ、コンゴとブルンジに 30 年も亡命していたツチが帰還できるように、家などを確保するためでした。なので、RPF の目的は、権力を掌握・確立し、その権力を長期化させることでした。その政治的野心を達成するために、ルワンダ在住のツチも材料に使われたのです。

また、RPF は国際社会にも圧力をかけました。虐殺中、

¹ スパイ行為や敵国の進撃を助けるような裏切り行為をする一団。

国連平和維持活動（PKO）に撤退するように訴え、実際に多くの要員が撤退しました。カガメは現在も「ルワンダが最悪だった時期に国際社会はわれわれを見捨てた」と話しています。しかし、見捨てたのではなく、カガメは PKO に居て欲しくなかったのです。

RPF の戦略：偽旗作戦と潜入

RPF は 1996 年にコンゴに侵攻した狙いは三つありました。一つ目は、コンゴとルワンダの国境に多くの難民キャンプがあり、そこにいた多くのフツ難民を支配下に置くこと。二つ目は、フツの人口数を減少することで、このフツの虐殺に関して、2010 年に公表された国連のマッピング・レポート（Mapping Report）にも記録されています。三つ目は、自分たちが裕福になるために、コンゴ東部の豊富な資源を確保することでした。またコンゴ東部における政治的野望もありました。

虐殺後の 1995 年から 1999 年、ルワンダでは 対反乱分子作戦（counterinsurgency）が展開されましたが、それは RPF が多量に行った偽旗作戦（false flag operation）でした。本作戦は、あたかも敵によって実施されているように見せかけるものです。つまり RPF が仕掛け、フツのせいにするのです。こうした偽旗作戦を展開したことで、RPF はコンゴへの侵攻を正当化しました。

ICTR での証言によると、1996 年 3 月、RPF はルワンダで偽旗作戦を計画したということです。その狙いは、フツの反政府勢力が地域を不安定化させ、虐殺が再発するかもしれないと国際社会に警告を発することでした。同じ証言によると、この偽旗作戦に関する計画の後に、ルワンダ北西部のルヘンゲリとギセコで攻撃が起きました。その結果、外国政府と国際メディアは激怒し、コンゴへの侵攻が正当化されました。

このような偽旗作戦は、その後も行われました。1996 年 7 月、キガリ郊外で起こり、同年 12 月、ムデンデ難民キャンプで 327 人のコンゴのフツ難民が殺戮され、267 人が負傷しました。この難民キャンプでの殺戮は非常に凶悪で、RPF は、現地の人が使うマシエツトという刀、釘がたくさん刺さっているこん棒、銃と手榴弾を使って人々を撲殺しました。

1998 年、タレという所でも偽旗作戦が行なわれました。現地にあった Pensez-Y というバーで、700 人の人々がワールドカップの最終戦が観戦していた際に、RPF は外から放火しました。

これらの証言は、全てカガメ政権の離反者らによるもので、フツからは聞いていません。

RPF 諜報局の役割

さて RPF がどのように権力を獲得でき、さまざまな罪を 30 年も隠し通すことができたのか。その鍵は、諜報局（Directorate of Military Intelligence: DMI）の構造と広く浸透している本質にあります。DMI は、軍の上層部から警官隊、軍事警察と研修局まですべての軍の部署の将校と下級将校にいます。DMI の作業員は、大隊、中隊、小隊の全てに潜入し、まるでロシア人形（マトリョーシカ）のように開ければ必ずいるのです。

この DMI はフツの民間人に侵入して、アバカダ（Abakada）という民兵組織を結成しました。このフツの民間人から成るアバカダが、RPF の罪を隠蔽したり、また時おり直接罪を犯しました。この民兵組織は現在、イントーレ（Intore）と呼ばれ、フツもフツも加盟しています。彼らは海外に派遣され、ルワンダ大使館員と一緒にスパイ活動したり、罪を犯しています。

イントーレが地元レベルで一番よくわかる組織は、隣人を監視するシステム、Nyumba Kumi（十の家）です。これは、軍部、政治と文民分野の作業員を使ってルワンダ人を支配しています。この監視システムの目的は、住民を恐怖で支配し、市民の過ちを正し、脅し、そして従順を強化することです。

コンゴにいたルワンダ難民によると、難民キャンプにも RPF のスパイがいました。最初は信じがたかったのですが、元 RPF の諜報高官と兵士が事実だと証言しました。

国連への潜入

DMI とその仲間の RPF 事務局—RPF の政治的政策を計画している—は、国際機関にも潜入しています。国連に潜り込んで要職を得て、罪を犯した RPF の要員を数名紹介します。

まず 1 人目がカレンジ・カラケ中将 (Lt General Karenzi Karake)。彼は虐殺後、DMI 情報局長を務め、カミと呼ばれる軍隊兵舎での冷酷な殺戮の責任者です。彼はカナダ人神父とスペイン人の援助団体の職員
の殺害にも加わり、1996 年のコンゴ侵攻を計画しました。カラケは 2007 年、ダルフル国連・AU 合同ミッション (UNAMID) の副司令官に任命され、2008 年、その任期が 1 年更新されました。スペイン政府が、虐殺、人道に対する罪とテロリズムの容疑で、彼に逮捕状を発行したのにもかかわらずです。

次に、パトリック・ニヤムヴンバ将軍 (General Patrick Nyamvumba) は、大勢の殺戮に手を染めました。RPF の支配地域で暗殺集団を主導し、そこでフツの民間人を殺戮しました。彼は 2009 年、UNAMID の司令官に任命され、2013 年までその要職に留まっていた。

ジャン = ボスコ・カズラ陸将補 (General Major Jean-Bosco Kazura) は上記のニヤムヴンバの下で副司令官として働き、フツの民間人の殺戮に加わりました。彼は 2013 年に国連マリ多元統合安定化ミッション (MINUSMAU) の司令官に任命され、2014 年までいました。

大佐フランシス・ムティガンダ (Colonel Francis Mutiganda) は非常に悪名高く、虐殺中、ンデラとビュンバでの殺害を主導しました。2011 年、ニューヨークにある国連本部の PKO で軍事計画サービスの次席として働いていました。採用後、国連は彼の前科を発覚したのですが、彼を解雇することはありませんでした。それは、ルワンダ政府が PKO に偉大な貢献をしており、国連に圧力をかけたからです。

准将イノサン・カバンダナ (Brigadier General Innocent Kabandana) は長年、ワシントンにあるルワンダ大使館付陸軍武官として働いていました。彼は、ルワンダ中央部と南部で多くのフツ民間人を殺戮しました。

フランスワ = ザビエル・ンガランベ (Francois Xavier Ngarambe) は、現在、国連人権委員会の副議長を務め、本事務局はジュネーブにある国連人権高等弁務官事務所にあります。彼は長年 RPF の民間部門の幹部

で、RPF が犯してきた犯罪の証拠を隠滅してきました。

クリステーン・ウムトニ (Christine Umutoni) は RPF の高官で、かつ長年、本政権のプロパガンダとイデオロギー信奉者の一人です。RPF の事務局において、政権が関与した犯罪を隠蔽し、虐殺の通説をつくりました。現在、モーリシャスとセイシェルで国連開発計画事務所 (UNDP) の代表を、そしてその前はエリトリアで同事務所の代表を務めました。

ジョセフ・ムタボバ (Joseph Mutaboba) も RPF のイデオロギー信奉者で、RPF による犯罪—特にコンゴでの資源の略奪—の隠蔽を行いました。彼も国連のさまざまな要職を歴任し、2013 年以降、ダルフルの UNAMID で副司令官を務めています。

最後に、キラボ = アイサ・カチラ (Kirabo Aisa Kacyira) は、長年国連人間居住計画 (Habitat) の副事務局長に就いており、DMI のカチラ長官の配偶者です。

ルワンダ難民申請者によると、RPF は難民受入国、援助団体、UNHCR に潜入しているせいで、彼らの申し立てが不当に影響されているとのこと。この現象は、特にケニア、ウガンダ、セネガル、マラウイ、マヨットで見られます。多くの場合、受入れ政府は難民申請者の申し立てを却下してきました。それは、UNHCR が RPF の雇用者のみをひいきし、本物の難民申請者に対して第三国定住を拒んでいるからです。

UNHCR がルワンダ大使館員を通訳として使っていることは知られています。難民申請者がなぜ逃亡したのか、なぜ迫害を怖れているのかといった非常にセンシティブな議論を通訳が聞いていることとなります。

NGO が RPF と協力

DMI と RPF 事務局がどのように、ルワンダのプロパガンダ作戦を監視しているのか。RPF の最も悪名高いイデオロギー主導の一人であるカトリック神父のプライベート・ルタジブワ (Privat Rutazibwa) は、西洋人学者でかつ NGO アフリカン・ライツ (African Rights) のラキア・オマール (Rakiya Omaar) と手を組みました。オマールは通説をつくるために協力し、DMI と RPF 事務局から指導を

受け、その通説を過去 25 年間維持し続けたことを成し遂げたのです。

彼女がイギリス人学者アレックス・デ・ワール (Alex de Waal) と共に、*Death, Despair and Defiance* (『死、絶望、そして抵抗』) という約 700 ページの本を出版しました。出版は、虐殺の終焉直後の 1994 年 9 月でした。彼らは、ルワンダの暴力とは、善対悪、つまり悪者はフツ、犠牲者はツチというナラティブをつくり上げました。何より、このナラティブは、RPF が救世者だったことを描いたこととなります。アフリカン・ライツが RPF の指導と支援を受けたことで、出版が可能になったことは今知られています。RPF からの資金援助があるという証拠もあります。

本書は ICTR に偉大な影響を与え、ヒューマン・ライツ・ウォッチなどの NGO も本書から多く引用しています。主流なナラティブが RPF に都合の良い虐殺ストーリーをつくりあげ、フツを悪者扱いし、援助国からの支援を働きかけるのに有益でした。

証言と証拠が抹消

一般に信じられている間違っただ説の一つに、虐殺が起きた数年以前からフツの旧政権が虐殺を計画していたことがあります。ICTR の検察局で勤務経験がある弁護士 2 人によると、本説は間違いで陰謀説です。その ICTR の上級弁護士によると、そもそもハビヤリマナ大統領の専用機が撃墜された時点で、本格的な捜査が行われるべきだったとのことでした。そうすれば、誰が、なぜ、どのような意図で行ったかという虐殺の真相が解明できたと言っています。

その上級検察官によると、ICTR はこういった事実を隠蔽し、罪を犯したカガメと彼の上級高官の起訴を見送ったのです。もし ICTR が本格的な捜査を行い、RPF 要員が起訴されていたなら、最終的な責任にあるカガメの起訴に至っていたからです。カガメは地政学的な理由で擁護されていますが、それはコンゴの資源を確保し、西洋諸国の市場への輸出という目論見があったからです。

国際社会に RPF のこのような犯罪を警告したルワンダ人とコンゴ人は多数いました。しかし、彼らは脅迫され、投獄され、口止めされ、殺されました。強力な国連や西洋

諸国によって貴重な証拠が抹消されたために、民族グループ全体の疑いが高まり、歴史的な虚偽表示によって不処罰の連鎖が現在続いています。

最後に、西洋諸国が意図的に抹消した証拠について幾つか紹介します。

まず、国連は虐殺中、ルワンダ東部で RPF 軍が住民を殺害し、その死体を焼却し川に捨てた、またトラックで遠隔地に連れて殺害した事実を把握していながら公表しませんでした。1994 年 9 月、UNHCR のコンサルタントだったロバート・グソーニー (Robert Gersony) 氏によるグソーニー・レポートが公表されました。本報告書に、国の 1/3 の領土で約 4 万人のフツが組織的に殺戮されたと明記されていましたが、国連が本報告書を抹消しました。

また、虐殺の直接的なきっかけとなったハビヤリマナ大統領専用機撃墜事件は RPF の仕業だという証拠があったにもかかわらず、カナダ人の ICTR 検察官ルイズ・アルブール (Louise Arbour) が捜査を打ち切りました。その理由は、ICTR は捜査をする権限がないというものでした。

その他、フツ難民から構成された政治的団体がコンゴとタンザニアにおいて調査をし、RPF 軍によって殺戮された 2 万人の犠牲者の名前をリスト化しました。その犠牲者は、RPF 支配地域のルワンダ北部で殺戮されました。この調査結果は ICTR に提出され、私もそのリストがありますが、結局握りつぶされました。その他、1994 年 6 月、RPF が支配し始めたギタラマにおいて 1 万 8000 人の男性、女性と子どもが殺戮され、そのリストも ICTR に提出されましたが、結局捨てられました。

ルワンダ難民は国際社会、特に国連に、完全に信頼を失いました。今後、信頼は果たして回復できるのか。その信頼醸成のために、国連はアフリカ中央部において説明責任を促進しなかったことに対する責任を真っ向から向き合わなくてはなりません。

国連が認識しなければいけないことは、犯罪が統治の手段となっている国への難民の帰還を推奨することが危険であることです。国連が犯した判断の間違いに気付き、その責任を取らない限り、ルワンダ難民の安全、尊厳、そして人権が守られることはほとんどないでしょう。

ご清聴ありがとうございました。

討論：各討論者のコメント



杉木明子（すぎき あきこ）：慶應義塾大学法学部教授。英工セックス大学大学院政治学研究科博士課程修了、政治学博士。専門は現代アフリカ政治、国際関係論。アフリカにおいて難民、民族紛争、「テロ」、海賊・海上犯罪等の調査・研究に従事。難民関連の主な著書・論文に『国際的難民保護と負担分担—新たな難民政策の可能性を求めて—』（単著）、『難民・強制移動研究のフロンティア』（共編著）、「ケニアにおける難民の『安全保障化』をめぐるパラドクス』『国際政治』190号（単著）。

私は本科研のメンバーの一人として、ウガンダのナキバレ、オルチंगाの難民居住地と、マラウイのザレカ難民キャンプとリロングウェなどで、ルワンダ難民の聞き取り調査や様々なステークホルダーに対するインタビューを行いました。

私が会った多くの難民は、1994年のジェノサイド時やその直後に国外に移動した人々です。避難先は、タンザニア、コンゴ、ウガンダ、コンゴ民主共和国が主流です。そして、1996年、1997年といったジェノサイドが一段落した時に帰還させられ、ルワンダにしばらく滞在した際に、ルワンダでさまざまな人権侵害や危険に直面し、隣国へ避難して難民になった人々です。

これらの難民となった人々は、1990年代後半にルワンダに帰還した時に、反政府活動をしていたという理由や、民族問題などにより主にルワンダ政府から迫害を受けました。また、ルワンダ国際法廷（ICTR）やガチャチャ裁判などで偽証することを求められる、拒否したために、恣意的に逮捕・拘禁され、拷問を受け、命の危険を感じて逃げてきたという人がかなりいました。それ以外には、難民受入国から戻ってきたところ、自分の土地や家屋が占拠され、不服申し立てを行ったら逮捕されたというような土地・不動産問題や、就労の困難、フツという理由で教育を受ける権利が否定され、差別されており、ルワンダにいても将来の見込みがないことなど、多様な理由で移動し、隣国で難民になったケースがみられました。

難民となった理由は多様ですが、これらの人々全てに共通するのは、帰還を断固拒否していることです。多くの人々が強く言ったのは、帰還させられるぐらいならここで死んだほうがましだということでした。

これまでのルワンダ難民の調査を行う過程で浮上してき

た幾つかの疑問があります。一つはタンザニア政府の対応です。1996年に、タンザニア政府はルワンダ難民を事実上強制送還しました。この時、タンザニア政府はルワンダ難民の送還の理由として自国の安全保障の問題に言及しました。タンザニア政府は、ルワンダ難民の多くはフツで、ジェノサイド時の加害者であり、このような人間がタンザニアにいたことが望ましくないと言及し、強制送還を正当化しました。

私はその言説に対していろいろ思うところがありますが、聞き取り調査をしながら思ったのは、ジェノサイドの加害者が果たしてどれ位タンザニアにいたのかということです。それから、1996年の12月までに退去しろということで多くの人々が帰還させられましたが、タンザニア政府は、帰還の政策を推し進め、ある一定の数のルワンダ難民が帰還した後、今度はノンフルマン原則を打ち出しました。ジェノサイドの真の加害者の多くは当時のハビヤリマナ政権の中核にいた人々ですが、これらの人々はルワンダへ戻ると危険であるために、帰還させられることができないとして滞在を容認したのです。タンザニア政府の政策は、無実な一般の市民であった人々を帰還させ、逆に加害者と考えられている人々はタンザニアに残るといふ、非常に奇妙な結果になりました。タンザニア政府がノンフルマン原則からいわゆるジェノサイドの加害者と言われているような人々の滞在を許可したのはなぜなのかがこれまで調査で疑問に思ったことの一つです。

二つ目に、非常に奇妙に思ったのは、ルワンダ政府がなぜここまで帰還を奨励するのかという点です。ルワンダは非常に人口密度が高く、土地不足も深刻です。さらに就労の機会も限られています。にもかかわらず、なぜここまで帰

還を奨励するのでしょうか。さらに、再びウガンダに逃れた難民達は、既に土地や家などを不法に占拠・もしくは没収され、異議申し立てをしたために逮捕され、拷問を受けています。このような迫害をし、帰還しても十分な居住環境が保障できないのにもかかわらず、なぜここまで執拗（しつよう）に帰還を奨励するのか。私自身、これまでアフリカのさまざまな国で難民の調査を行ってきましたが、出身国政府がここまで執拗に難民となった自国民の帰還を奨励して、さらにさまざまなプロパガンダ工作まで行うというケースはみたことがなく、ルワンダ政府の対応は、非常に希有（けう）な例ではないかと思えます。

それと同時に、ICTR やガチャチャ裁判で間違った証言、つまり政権側から言えと言った証言を拒否した人に対しては、非常に熾烈（しれつ）な仕打ちが待っていることも衝撃的でした。多くの難民達の聞き取り調査を行う中で、RPF の掲げていた移行期正義や国民的和解は、本当は何だったのだろうかと思うようになりました。一般的にアフリカ政治を教える者あるいは学ぶ者は、ルワンダの RPF は、移行期正義、国民和解にジェノサイドの後は積極的に関与してきたと理解してきたと思えます。しかし、現実には違うのではないかと認識するようになっていきます。

ルワンダ難民の帰還と再流出のパターンですが、1990年から2016年までの帰還した人たちの数と難民・庇護（ひご）申請者の数を、UNHCR の統計に基づきグラフを作成しました。ただし留意したいのは、この統計がルワンダ難民の数を正確に伝えているとは言えないことです。ルワンダ難民の中には、自分たちの存在を知られることが身の危険につながるため、庇護申請などを行わず、難民として登録されていない人たちもいます。実際の数は、もしかしたら UNHCR が提示している庇護申請者、難民の数よりも多いのかもしれない。

特に注目していただきたいのは、1997年以降です。これまでのパターンをみると、大量のルワンダ難民が帰還すると、その後に必ずルワンダ難民が増加し、相対的にルワンダ難民の数は増えていません。帰還した数が増えると、その後しばらくして難民の庇護申請者の数が増えるという現象が見られます。どの国に避難しているかはその受入国の政策によって違いますが、いずれにしても、帰還を

奨励しても、ルワンダ難民のトータルの数は変わらないことが見えてくると思えます。

こういった自分の調査、あるいは実態のほうから見えてきて、従来定説されていたこととかなり違うのではないかと気付きました。他にも何人かの研究者や報告書なども読み見えてきたのは、ルワンダ難民が帰還を拒否する理由は、今の政権の統治下における構造的な問題と密接につながっているということではないかと思いました。

ルワンダ国民和解や民主化などと言っていますが、実態として見えてくるのはツチ至上主義によるカガメ大統領を頂点とした独裁体制であり、このような政権の運営の仕方は、ルワンダの歴史を見てみると、特に RPF が特別ではなく、歴代のルワンダ政権の政治的な文化を継承していることがわかんと思えます。

それから、帰還を奨励しているルワンダ政府は建前でもルワンダは平和で治安も安定しているから帰ってきなさいと言いますが、こういったことは誰のための平和で誰のための治安なのかを考えると、今の政権の都合を優先した帰還政策が実施されていることが明らかになると思えます。RPF 政権は国民和解、平和構築を掲げていますが、それらの名の下で実際には虐殺の加害者（＝ツツ）や被害者（＝ツチ）を固定化している。

ルワンダ政府の非常にうまい国際的なプロパガンダ政策を行っており、例えばルワンダの経済成長は非常に著しく、アフリカの奇跡などと言われています。しかしデータの改ざんや統計の粉飾が行われ、実際にはジニ係数などは年々高くなっており、貧富の格差が拡大しています。政治的に RPF 政権が民主的でないと、人権侵害などが批判されると「アフリカの民主主義」を掲げ、人権問題の批判に反発しています。ルワンダの政権運営を批判する人々を「ジェノサイダー」と呼んだり、ルワンダのジェノサイドが最もひどかった時に国際社会はルワンダを見捨てなどと言い、1994年のジェノサイドを巧みに政治的に利用してきたと思えます。

こういったルワンダの政治状況を見ると、そして現状とルワンダ難民の帰還を結び付けて見るならば、ルワンダ難民の帰還には問題が多々あります。一般的に難民問題の三つの恒久的解決策があると言われてきました。それらは、

庇護国定住、第三国定住、そして帰還で、帰還はしばしば最も望ましい方策であると言われてきました。しかし、その点に関してはもう少し考えてみる必要があるかと思えます。難民の帰還にはさまざまなタイプがあり、自発的な帰還が望ましいと言われていています。難民の自国が安定したために自ら判断して出身国へ帰るといふ Spontaneous return と言われる無計画な帰還もあります。非自発的で強制的な送還でノンフルマン原則に抵触するような帰還もあります。

従来、難民の帰還は自発的帰還が行われるべきだといふ原則を UNHCR、受入国、出身国は掲げてきましたが、近年は「安全で尊厳のある帰還」という言葉が使われていて、自発的帰還の原則から逸脱した形での運用へとシフトしてきています。出身国が安全であれば、難民の意思に反しても帰還させてもいいと言われるようになってきたのです。

実際に、非常にグレーゾーンの帰還が行われてきています。例えば難民キャンプ、あるいは難民に対する支援を削減したり停止するという、一種の兵糧攻めが行われるケースがあります。あるいは帰還すれば、これだけの資金を提供するというような形でインセンティブを難民に提供したり、あるいは難民の終了条項があるので、帰らなさい、帰らないならば不法滞在とし、拘禁し、強制的送還する、と脅すケースもあります。このように自発的な帰還が本来意味する原理・原則と異なる運用が恣意的に行われています。

多くの方はご存じのように現在、難民を最も多く受け入れているのはトルコです。それから、難民受入国で最も難民受け入れ数が多い上位 10 カ国はほとんどが開発途上国です。2017 年はドイツが入ってくるというイレギュラーな形ではありますが。このような状況から難民受入国にとって負担であるため難民の帰還を打ち出されるのは一理ありますが、難民の帰還が難民問題の解決にはつながりません。帰還後に難民はさまざまな点で安全や社会統合などの問題に直面します。特に、拙速な帰還をさせるために、帰還した国で治安が不安定化したり紛争が再発するというケースもあります。

このような非自発的な帰還にはさまざまな問題が伴い

ます。難民の帰還事業には多大な費用が投入されています。例えば 1996 年にタンザニアでルワンダ難民の強制的な帰還が行われた時には 150 万ドルの予算が費やされたと言われていています。しかしながら、ルワンダに帰還させられた難民は再流出しています。そのようなことを考えると膨大な費用を帰還事業に費やして、それに見合う利益は本当にあるのかを考えてみる必要があると思えます。

もちろん、難民の受入国にとって、受け入れに伴うさまざまな負担があると思えます。これは、特に難民の受入国が開発途上国であるため国際的な難民の受け入れに関しては、負担・責任の分担は必要だと思えます。その負担分担には、財政的な負担分担と物理的負担分担があります。

先ほどのルワンダ難民のように、無理やり強制的に帰還させられても、再流出し、不規則な第 2 次、第 3 次移動というように移動が継続する要因になります。このような状況から、強制的な帰還がもたらす弊害を考慮すべきだと思えます。

もちろん、難民問題の根本的な解決には、難民を生じさせる原因に対処する必要があり、特に人権侵害や紛争の要因等へのアプローチも考慮すべきではないかと考えています。

高橋 20 年前に発表した難民帰還に関する自身の論文（‘The UNHCR Handbook on Voluntary Repatriation: the Emphasis of Return Over Protection’, 9 *International Journal of Refugee Law* 4, 1997）が今でも引用されている事実は、難民の悲しい事態です。

難民が発生した事態には国際的には三つの解決方法があるとされています。一つ目が帰還。二つ目が、受入国で住み着いて、要するに受入国に溶け込んで、ゆくゆくは受入国の国籍を取得する。三つ目が、第三国への再定住。

難民の圧倒的大多数を受け入れているのは隣国です。

隣国は大方途上国であり、難民を受け入れるキャパシティーがあまりないので国際社会の支援が飛鳥とされたり、責任分担の必要性が言われます。これもバーバラから学んだことの一つですが、これらの考えの魂胆には、難民イコール負担であるという発想が見え隠れしていると気付いていただきたいです。それはともかく、要するに隣国に多くの人が逃れると、隣国にキャパシティーがないという問題があって、この三つの解決法があるとされています。

この三つの解決も国際社会の専門家たちが勝手に決めつけたことであって、これは決して難民たちの代表的な声を受け入れたものではないということは、バーバラに学んだことです。

冷戦中はソ連圏から西ヨーロッパに逃げた、いわゆる政治亡命者の帰還はほとんど注目されませんでした。彼らは物理学者だったりバレリーナだったり、白人であり、キリスト教徒であり、とても教養があります。なおかつ人数も少なく、加えてベルリンの壁を越えてきた人とかハンガリーからオーストリアに逃げてきた人たちというようなことがあり、基本的にその帰還はほとんど注目されませんでした。もちろんこの60年代、70年代もアフリカとかアジアには大勢の難民自体はありましたが国際的な政策をつくる場合はヨーロッパ中心に回っているので、ほとんどそれは注目されませんでした。基本的にはヨーロッパの状況ばかりが注目され、要するに帰還というのはほとんど誰も議論をしてこなかった。受入国での統合ばかりが強調されます。

80年代に入ります。安価で飛行機に簡単に乗れるようになり、冷戦はどんどん下火になるなどいろいろ条件が重なり、転じて、帰還が強調されるようになります。一因は、ヨーロッパにそれまで届かなかったアフリカやアジアの難民が実際に届くようになりました。肌の色、宗教、言語の違う汚い集団を多く受け入れる話ほとんどもない、帰還が重要だという話になります。そこから始まり、国際的な政策の議論の場では帰還が突如として重要視されていきます。

それがルワンダにもその動きが来ました。そこで帰還というものが目的化してしまうという空気が強くなります。難民が隣国に行く spontaneous return という現象があります。難民は人脈や情報網があるため、安全になったらしいと判断して国連の援助を受けずに自分たちで帰るという意

味です。spontaneous というのは突発的という意味で、難民をばかにした言い方ですね。誰にも言われなくて自分たちの情報で帰ります。実は難民の多数がそうなのではないかと言われてたりしますが、あまり把握されていません。

キャンプに入って国際的な援助を受けてキャンプという閉ざされた世界に入れられてしまう難民たちもいて、その帰還がどんどん進められていくという事態が1980年代後半辺りから顕著になります。

厳密にいうと、出身国が安全になった場合、彼らを難民として残す必要がないため難民条約の停止条項を使い帰還させることは、法的には可能です。彼らは難民の地位を失い、それで彼らが本国に自主的ではなく強制的にでも帰されるようにというような事態が起きますが、国際的には非常に極端なので、なかなか使われてきませんでした。それがルワンダ難民に対して使われるようになったのが現状です。

自主的に帰ってこない難民たちに、国連などが、自分たちで得た情報を難民たちに提供して、出身国が安全になったから帰って大丈夫だと、国連のお墨付きだよということで、帰還を勧めます。そのほうがいわゆる停止条項を使って無理やり帰すよりは格好がつくので、そういう方向にどんどん行っています。そこで尊厳を持って自主的に帰るとい言葉がどんどん独り歩きしますが、そもそも安全かどうかが一番の問題です。客観的に、停止条項を使うか使わないか、情報を提供するかしないか以前の問題として、安全でなければ、国際社会が帰還を勧めること自体おかしいと思います。誰がどういうプロセスを経てどういう情報を基にして安全と判断するのかに溝があります。

往々にして国際社会、国連という組織が特に力のある政府のプレッシャーを非常に受けやすいものであるということは事実だと思います。政治的なプレッシャーがあつてこやうやって帰還が進められる、これは決してルワンダ難民だけではなく、今でも多く見てきた現象で、それがまたルワンダで繰り返されるとというのが非常に嘆かわしいことです。

米川 本研究を通じて学んだことのうち四点に絞ってお話します。

一点目は、帰還が大変政治的であることです。一般的に帰還はよいものだという固定観念がありますが、時にはそうでない場合もあり、政治的な目的を有することもあります。なぜルワンダ政府はこれだけ帰還を奨励しているのか。これはおそらく、国外にいる難民を不安定化させたり弱体化させるという目的があるのではないかと思います。1990年にRPFが侵攻した歴史があり、その侵攻を「武装帰還」だと呼んだ研究者がいます。当時のRPFの目的は、単に帰還することだけではなく、帰還して政権を奪取することだったために、政治的な目的があったのです。

二点目は、難民たちはかなりの恐怖心とトラウマを抱えていることです。もちろん、それは虐殺などと関連していますが、それ以外に、現在の帰還政策が彼らのトラウマを悪化させています。この25年間、UNHCRやルワンダ政府から帰れ、帰れと説得され続けて、国名のルワンダを聞いただけでトラウマになっている人もいます。UNHCRは本来、難民を保護する任務を有しているにもかかわらず、反対に彼らに恐怖感を与えている事実も知っていただきたいです。

三点目に、保護に関する問題ですが、難民はUNHCRではなく、庇護国における教会、神父さんや現地の人権団体、そしてコンゴの場合、反政府勢力に保護を求めています。それは、UNHCRが難民を保護せずに帰還を奨励しているため、難民はUNHCRに不信感を抱いているからです。残念ながら、国際人権団体のヒューマン・ライツ・ウォッチやアムネスティ・インターナショナルは、ルワンダ国内の人権侵害には厳しく批判していますが、ルワンダ難民に関して黙認しています。だから難民は人権団体にも保護を求めることはできないのです。

それ以外に、難民は自分で自身を保護しています（自己保護・「セルフ・プロテクション」）。どのように保護するかというと、自分の国籍を変えるのです。自分がルワンダ難民だと言うと、特にフツは「虐殺の加害者」というレッテルを貼られてしまうため、コンゴ難民やブルンジ難民に偽装する人も多くいます。そうすることで、他のコンゴ難民のように、UNHCRなどから支援を受け取ることができる、あるいは

第三国定住ができるといったメリットがあります。

その一方で、国籍を偽装することによってデメリットもあります。難民の中には、自分の子どもに自分のルーツを伝えることができないと話をしてきた人もいました。

四点目に、外部者の役割に関してですが、日本人やアジア人が遠いアフリカを研究する価値があるのかと聞かれることがあります。しかし、外部者だからこそできることはたくさんあります。例えば、フランス人の研究者がルワンダになかなか介入しにくい背景があります。あるフランス人研究者に言われたのが、「君は外国人で良かったね、自分はルワンダ難民をずっと研究してきたが、現在はなかなかできない」と。なぜなら、フランス人は、虐殺に加害していたと言われている旧ルワンダ政府と友好関係を維持していたために、フランスは虐殺に関与していたと非難されているためです。なので、ルワンダにこれまで何のかかわりがなかった日本人の研究者の方が有利な場合があります。

もう一つ、外部者だからこそ難民の本音を聞くことができる場合もあります。特に、ルワンダ難民のコミュニティ内にRPFのスパイがいるといわれているため、同房のルワンダ人に不信感を持ち、なかなか真実や悩みを共有できない人々が多くいます。なので、かえって外部者の方が話しやすいこともあるのです。

ただ、外部者であれば誰でも聞き取り調査ができるのかというと、そうではありません。今回私がルワンダ難民に話が聞けたのは、知識がある程度あったことと、バーバラやジュディなどのような信頼されている紹介者がいたことも大きかったです。

バーバラが率いるRights in Exileは、ルワンダ難民の終了条項の適用に反論した唯一のグループです。他の国際人権団体、ヒューマン・ライツ・ウォッチやアムネスティ・インターナショナルがそれぞれ沈黙を保っている中で、バーバラが「フツの過激派（フツ難民）を支援しているのでは」と非難されながらもアドボカシー活動を続けたことは、偉大だと考えています。ジュディも非常にセンシティブな真相を暴露したため、ルワンダ難民から大変高く評価されています。そのようなバーバラとジュディ、あるいは他のルワンダ難民からの紹介で難民に会うと、最初から本音を吐き出すように話してくれ、長年の苦辛を痛感しました。

実はルワンダ難民が執筆した本は多数あります（下記の写真のスライド参照）。² 他国出身の難民がどれだけ自伝本を出版しているのかわかりませんが、バーバラや他の研究者によると、ルワンダ人ほど本を出版した難民はいないかもしれません。

これは何を意味するのでしょうか。ルワンダ人のトラウマ

や苦悩の度合を示しているだけではなく、ルワンダ人が勤勉で、次世代に虐殺のことを伝えたいという強い思いの表れでもあります。それ以外に、執筆活動を通して彼らが癒やされたいという願いもあるのです。難民の苦しみやトラウマをより理解したい方は、ぜひこのような本を参考にしてください。



² 数冊挙げると、Pierre-Claver Ndayayisenga, *Dying to Live: A Rwandan Family's Five-Year Flight Across the Congo*, Baraka Books, 2013; J. Sebarenzi, *God Sleeps in Rwanda: A Journey of Transformation*, New York, Atria, 2009; T. Rudasingwa, *Healing A Nation, A Testimony:*

Waging and Winning a Peaceful Revolution to Unite and Heal a Broken Rwanda, South Carolina, CreateSpace Independent Publishing Platform, 2013; M. B. Umutesi, *Surviving the Slaughter: The Ordeal of a Rwandan Refugee in Zaire*, Wisconsin, University of Wisconsin Press, 2004.

Lecture “Why post-genocide Rwandan refugees are not returning 'home': examining the 1994 genocide and other war crimes”

Judi Rever

A word of thanks: I’m honoured to be here, and I’d like to thank Masako Yonekawa and Rikkyo University for inviting me.

Masako’s research and mine are complementary in many ways. We’re both conducting interviews in a spirit of inquiry. We’ve both tried to interview as many Rwandan refugees as possible. We seek to go beyond conventional assumptions, and unearth the stories that have remained buried for so long. We question claims that are often repeated, but are not verified and lack strong, factual foundation. Many claims have been absorbed and regurgitated to the detriment of the safety and dignity of Rwandan refugees over the last three decades. Our research seeks to better understand the painful history of Central Africa, how events happened and why. Most importantly we both seek to identify and understand the mistakes the West has made in policy making.

The official narrative of the genocide was created by the Rwandan Patriotic Front and cast in stark, ethnic terms. The one category of victim - one category of perpetrator model has been used to defend and justify the indefensible. This narrative has irrevocably changed the lives of millions of people, especially in Congo, and inured westerners to their suffering.

My work specifically seeks to re-examine the genocide. We know there was a genocide against the Tutsis but how this occurred, and what happened to Hutus has been less clear, historically speaking. The re-examination of the violence leads us invariably to the central question of why Rwandans who fled in 1994, and after, are unwilling to go home.

By critically examining RPF’s record on an evidence basis – by investigating what they actually did before, during and after the genocide – we become able to see the RPF’s extraordinary capacity for deception. I believe that in piercing the RPF’s capacity to deceive --in seeing it and exposing it -- we then need to accept a paradigm shift in how we view repatriation and UN policy regarding Rwandan refugees.

I was compelled to re-examine the genocide after a life-changing trip to Congo, as a young journalist covering the humanitarian crisis, just days after Congo’s dictator Mobutu Sese Seko had been toppled by Paul Kagame’s troops and their rebel allies in May 1997.

In May 1997, Rwanda was in control of a vast country. Its troops occupied Congo’s main cities, its villages and even strategic areas of the forests.

I went into the forests of Congo with local aid workers from UNHCR, Doctors Without Borders and the Red Cross, who were conducting search and rescue missions to find missing Rwandan Hutu refugees, survivors of attacks by Kagame’s Tutsi soldiers. What I saw first hand was the ugly face of the RPF. I met dozens and dozens of survivors, Rwandan Hutu men women and children, some of who were on death’s door, battling

disease, infection and hunger. Some appeared catatonic after having survived attacks and being chased across brutal terrain. Others were lucid enough to tell me their stories.

The scenes of suffering, and witness accounts of atrocities in the jungle were apocalyptic and have never left me.

Many refugees south of Kisangani told me how these Kinyarwanda-speaking troops had opened fire on their camps and killed tens of thousands of their family members in a weakened, sick state. Survivors who were strong enough scattered and were chased some more. Some survivors who were caught again were forced at gunpoint by Rwandan soldiers to bury their loved ones.

We largely know this horrifying story but it is in Congo got clues in those interviews to another, very disturbing story.

I wanted to know why most of the Rwandan Hutu refugees fled Rwanda in the first place and why they stayed in camps in eastern Congo, after the genocide, and refused to go home. If the Hutus had killed Tutsis, and the RPF had stopped the genocide – and the international community was insisting it had been safe to go back their homeland -- why didn't they go home?

They told me they fled Rwanda in 1994, in the first place because the RPF had killed their families. They were afraid of them. They said they stayed in the camps because they were afraid to go home. When I first heard this, I was astonished and skeptical. But after hearing it anecdotally so many times, the stories started to coalesce and settle into my brain.

These refugees also told me that others who been pushed or encouraged to go home, by the United Nations or the new Rwandan government, were disappearing.

One of the most striking and tragic inconsistencies was the repatriation against their will of many Rwandan refugees who were found in traumatized, ailing states in the forest. Expatriate staff insisted that these refugees -- even Rwandan orphans who had been taken in by Congolese villagers -- had to go back to Rwanda, because this was policy; it had been decreed by the UNHCR. Aid agencies argued that returning home would be safer for the refugees because it was too dangerous in Congo. Most of the refugees disagreed. As haggard and as traumatized as they were, they told me that they would face *more* danger in Rwanda. Somehow they knew what might await them.

In the end, refugees were given minimal food and sent to transit camps, before being loaded onto planes and sent back to Rwanda.

Yet the same expatriate staff knew full well that it was Rwandan forces that had chased and killed Rwandan refugees across Congo. So their insistence that refugees would be safer in Rwanda -- a country that had ordered the massacres -- made no sense whatsoever. Herein lay one of the first, most flagrant ethical and moral contradictions on the part of the UNHCR that I came across. Sending refugees back to the people who killed their families was a serious breach of trust with regard to the UN's responsibility to protect Rwandan refugees.

None of the expatriate staff would speak on the record about this reality. They often

referred to the Rwandan army's attacks elliptically, or in passive or abstract terms, as 'violence refugees were exposed to', or the 'troubles'. But they refused to state squarely who was behind this violence and why. Medecins Sans Frontières (Doctors Without Borders) released an important report that revealed an estimated 200,000 Hutu refugees had gone missing. But expatriate staff on the ground – because of understandable fears for their safety -- were hesitant to discuss in detail those findings.

I eventually went to Rwanda to collect more testimony from Rwandans who were forced to return home. Those interviews took place in transit camps and in villages, and were difficult because refugees appeared not to trust interpreters, and RPF soldiers were often in the vicinity. Yet there were two things I managed to get more details on: that Hutus in Rwanda now lived in fear, and they, like Tutsis, were still mourning the loss of their family members who'd been killed in 1994. I also realized that many refugees who were returning to Rwanda in 1997 did not have access to their homes because they were occupied by Tutsi families. The representative for the UNHCR in Rwanda, Roman Urasa, confirmed this in our interview in Kigali, at the time. The country was highly unstable in 1997, and it was not clear who was behind a spate of attacks against civilians in the northwest of the country. But as time wore on, it became clearer that the RPF was conducting an ethnic cleansing campaign in the northwest region of Rwanda, around Gisenyi and Ruhengeri, to reduce the number of Hutus and eliminate potential supporters the former Hutu regime.

It was after that trip to Congo that doubts turned to disbelief over the claims that the RPF had stopped the violence in 1994 and was at the forefront of an African renaissance and was rebuilding the nation. I listened to my recordings of interviews with refugees, remembered what I saw, and I seriously re-evaluated my world view. It was deeply troubling.

I want to make something very clear. It's one of the most important messages I can share with you today:

There has been, historically speaking, a lack of rigorous, independently conducted interviews with Rwandan Hutu refugees in Central Africa (why they fled Rwanda in the first place) -- and with Tutsis who have broken with the regime in the intervening years. The lack of empirical studies has been a colossal failure, on the part of human rights activists, NGOs, the UN, academics, and journalists. And it has impeded our understanding of the dynamics of violence.

Over the years I've interviewed hundreds of victims and witnesses, direct and contextual, along with former members of Kagame's army and intelligence who broke free and fled. I've also spoken with lawyers and investigators who worked at the International Criminal Tribunal for Rwanda.

I wanted to understand the mechanics of Kagame's killing machine, what the violence looked like, and what they got away with. And I wanted to understand who let them get away with it, and why.

The core conclusions of my book, ***In Praise of Blood, The Crimes of the Rwandan Patriotic Front***, are based on testimony from

my interviews and from leaked UN documents. They are the following:

Kagame and his RPF ignited the genocide by shooting down the plane that was carrying Rwanda's president Juvenal Habyarimana and his Burundian counterpart, Cyprien Ntaryamira.

Immediately after the plane attack. Kagame soldiers and officers, from military intelligence and the Training Wing and High Command began carrying out systematic massacres behind the battlefield, in every area it seized from former Hutu forces, in every prefecture in Rwanda in 1994.

These mobile forces operated with zeal from the northern prefecture of Byumba down the eastern side of the country through Kibungo, to the south, then up and throughout the rest of Rwanda. These forces targeted Hutu community leaders and then went after peasants. They lured Hutu peasants to meetings, then slaughtered them and buried them, sometimes with Tutsis who had been killed by Hutu militia known as Interahamwe. Sometimes the RPF burned the corpses of Hutu victims on the spot, depending on the circumstances. In many instances, the RPF would load hundreds of people into trucks and cart them off to a military barracks called Gabiro or in other places in Akagera Park in the eastern side of the country, and kill people before burning and incinerating the victims.

(So as Tutsis were systematically targeted and killed in Hutu controlled zones, so were

Hutus systematically targeted in RPF held zones during the genocide)

During these killings, obviously journalists and international officials were not present. The few journalists who were on the ground would have been escorted to these areas afterward by the RPF, but were not privy to them as they were happening. So these crimes were largely hidden. The United Nations had some degree of knowledge of them, however, as they were happening. The RPF got away with these crimes because the International Criminal Tribunal of Rwanda (the ICTR) allowed it to, at the request of the United States, Rwanda's major Western ally. The ICTR refused to indict Kagame and his henchmen for these crimes. It buried the evidence and cemented Kagame's impunity.

In my book I also reveal that RPF commandos, mainly from High Command Units and the Directorate of Military Intelligence, infiltrated Hutu militias and engaged directing in killing Tutsis, in clandestine operations all over Rwanda. These operations created more Tutsi victims, ignited a greater moral outcry, demonized the Hutu regime and Hutu civilians in general, and helped strengthen the RPF's moral legitimacy. So Kagame and his RPF fuelled the genocide against Tutsis as well.

This infiltration by the RPF throughout Rwanda, was key to its success in seizing territory and gives us clues about the genocide unfolded. This infiltration obviously was planned and in place before the plane was shot down. We see, for example, the way violence was unleashed in Butare in early 1994, the chaos and fear that ensued.

Evidently it was a test for how violence would play out if the president were assassinated. The RPF never wanted peace. It did not want a broad based coalition government. It wanted war as a context and excuse to seize power.

The RPF not only infiltrated the Interahamwe but they infiltrated other youth wings, of other Rwandan parties, as well. These militias were called the Inkuba, the Abakombozi, and the Impuzamugambi. The killings of two key Hutu politicians, Felicien Gatabazi and Martin Bucyana in February 1994, which the RPF was ultimately responsible for, sparked violence in Butare and Kigali that left 37 people dead. The prefecture of Butare, by the way, was extensively infiltrated by the RPF prior to the genocide.

In addition to these commandos, countless Tutsi civilians were being brought into Kigali to the RPF headquarters at a building known as the CND. These Tutsi civilians constituted a fifth column for the RPF. So with the help of these cadres and commandos, the RPF had successfully infiltrated the capital and other areas of Rwanda by 1993. By April 1994, the RPF had some 600 cells throughout the country, 147 of them in Kigali.

Let me add, as a side comment here, Rwandan authorities have not officially reacted to my book. It cannot because it knows the evidence is unassailable and irrefutable. Although it has engaged pro-Kigali propagandists (specifically people who call themselves journalists) in France, in Holland and in Rwanda to write defamatory statements about me and my research.

Very briefly I'd like to paint a picture of what northern Rwanda looked like after the RPF invaded in December 1990. There is very little documented in international human rights reports of the RPF's three-year scorched earth campaign. I describe it as such because senior founders of the Rwandan Patriotic Front, such as Alphonse Furuma, said that's what it was like, and victims I have interviewed from the northern prefecture of Byumba, in addition to Italian and Belgian Catholic priests have described the horrors of the RPF invasion, Major Furuma said the RPF committed systematic massacres, laid land mines, looted properties and destroyed crops in a bid to displace the Hutu population in the north of the country and create, he said, a Tutsi land in the north for returning Tutsi refugees who'd been in exile in Uganda since the early 1960s. It also shelled refugee camps with mortars and rocket launchers.

An Italian priest named Giancarlo Bucchianeri I spoke with documented horrific RPF atrocities against patients at a health clinic. He also told me that RPF laid land mines around the springs where local children would go to fetch water every morning. The mines exploded and so did the children's bodies. Father Giancarlo said by the end of 1993, up to a million Hutu refugees were displaced and living in squalor in the camps. A MSF aid worker named Pierre Laplante said sanitation was the most pressing problem in the camps. The children contracted scabies, parasitic infections, diarrhea, tuberculosis and a host of respiratory infections. It is in this desperate context that the seeds of Hutu extremism against Tutsi were planted, and grew.

What were the RPF objectives of its invasion war from 1990, and its ultimate military aims for unleashing violence on April 6, and committing massacres in 1994 and thereafter?

It is clear that the RPF killed massively and in most cases, did so methodically and with the intent to eliminate or reduce the numbers of Hutu civilians and establish ethnic domination. The motives for these ethnic-based killings were strategic, according to former members of the RPF. One of the principle reasons was to remove Hutus from political and military power, and replace them with Tutsis. The RPF also targeted Hutu teachers, artists, business people, lawyers and judges because once the core military, political economic and cultural leadership of the previous regime was gone, the RPF could govern with little resistance. The RPF also ordered its military to cleanse regions - exterminating as many Hutu peasants as possible - especially in the north, because it wanted to mould the population map and secure housing and belongings for Tutsis returnees who had been living for decades in Uganda, Congo and Burundi.

As I wrote in my book, the RPF agenda in 1994 was to seize power, consolidate it and ensure that its members could rule for many years. Interior Tutsis were fodder for its political ambitions. As Rwanda's body count soared, and the RPF was able to claim it was saving Tutsis even as it was sacrificing them. By sharing the same ethnicity as interior Tutsi, the Ugandan-raised wing of the RPF cemented its moral status as victim and savior. To top it off, the RPF threatened the

international community in April and May 1994, demanding that it not intervene as Rwandans lay bleeding. And the world obliged. The United Nations pulled the bulk of its peacekeeping troops out of Rwanda, and a skeletal force that remained observed the violence as it ensued. Kagame would later declare that the world abandoned Rwanda during its darkest hour.

The aims of the RPF's invasion of Congo were three-fold: first, to exert greater control over the mass of Hutu refugees in the camps on the border (that strategy is inherent too in convincing the United Nations to force neighbouring countries to invoke the cessation clause for refugee status and force them back to Rwanda); second, to reduce numbers of Hutus, which is evident in the massacres as documented in the Mapping Report of 2010; and third to get access to the resource-rich Kivu provinces in eastern Congo, for its own enrichment. The creation of Rwanda-backed militias over the years, and the alliances its army has made with a myriad of smaller Congolese militias, which armed-groups expert Steven Hege documented for the UN Group of Experts report in 2012, is evidence of Rwanda's wider political ambitions in the Democratic Republic of Congo.

It was after the genocide, during the counterinsurgency period between 1995 and 1999, that RPF forces staged the greatest number of staged attacks, or false flags. These are attacks that are designed to deceive. They're meant to make it look like the enemy committed the attack. In this case,

the RPF staged a number of attacks it blamed on Hutu insurgents.

These false flags helped justify the RPF's foray in Congo. A former RPF intelligence officer testified to the ICTR that in March 1996, he overheard Kagame, James Kabarebe and Colonel William Bagire discuss staging attacks in Rwanda in a bid to convince the international community that Hutu rebels were destabilizing the region and threatening to re-ignite genocide. One of Kagame's key commanders at the time, Emmanuel Ruvusha, eventually launched attacks in the region of Ruhengeri and Gisenyi, according to the testimony. These attacks elicited outrage from foreign governments and international media, and helped justify Kagame's invasion of Congo.

Other staged attacks by the RPF that were blamed on Hutu insurgents were: the attack in Kigali Rural in July 1996, and the Mudende refugee camp attack that killed 327 Congolese Tutsi refugees and left 267 other wounded in December 1997, in which RPF commandos used machetes, nail studded clubs, guns and grenades to slaughter their victims. Another false flag occurred in 1998 in Tare, when RPF soldiers from the 7th brigade set a bar called Pensez Y, containing several hundred people, on fire, while they were watching the World Cup Finals.

How did the RPF carry out such heinous acts, and how do they still get away with it?

The key to understanding how the RPF achieved power in Rwanda and concealed crimes for nearly three decades in the Great

Lakes region – and how it exerts tight control over Rwandans at home and abroad -- lies in the structure and pervasive nature the Directorate of Military Intelligence. DMI is the brain of the RPF organism. It runs counterintelligence, criminal investigations and prosecutions, it oversees research, records and registry department. It has officers and lower-ranking staff in every division of the army, from the Republican Guard, a military unit formerly known as the High Command, to the the Gendarmerie, the Military Police and the army's Training Wing.

Its agents have thoroughly infiltrated the regular army, with representatives at every level of each battalion, from the company to the platoon to the smallest section. It is like a matryoshka structure, the Russian dolls you open only to find another one inside. DMI has representative soldiers and officers in every battalion, in every company, platoon, and section, creating a spider web of intelligence operatives that order, instigate and help carry out crimes. It tapped into the Tutsi civilian population to create a militia whose members were called abakada. These people were used to cover up, assist and sometimes participate directly in crimes.

Today, they are called Intore, and there are Hutus and Tutsis among their ranks. These civilian cadres are also sent abroad to spy on and engage in criminal activities abroad, and work hand in hand with Rwandan embassies.

The presence of civilian cadres is felt acutely at the local level, through a neighborhood surveillance system called Nyumba kumi that uses agents from military, political and civilian spheres to exert control. There are often as

many as four cadres members monitoring every ten, or even fewer, households in Rwanda. These cadres report to DMI agents and representatives of the RPF Secretariat (the RPF's political bureau that works with DMI), and they work jointly with members of a separate military reserve force known as the Inkeragutabara. Other DMI intelligence staff are present to secretly spy on the cadres in the Nyumba kumi system. The objective is to instill fear, keep civilians in their place, to intimidate and force obedience.

Anecdotally, Rwandan refugees in Congo told me that there were RPF spies in their camps, and I had a hard time believing this, at first. It seemed far-fetched to me. Former RPF intelligence officers and soldiers have confirmed to me that this is true. DMI used agents from their headquarters and within battalions to infiltrate the camps in Congo and also used Congolese civilians to get inside the camps. The RPF would coerce or bribe Congolese. The key department that carried out this task was the Counter Intelligence of DMI. The same former intelligence officers have told me that the story often repeated by NGOs, the UN, and journalists that Hutu refugees were being forced by armed Hutu elements to stay in the camps against their will, was a fabrication created by DMI.

DMI, and its cohort organization the RPF Secretariat, is also behind the RPF's infiltration of international institutions.

The following individuals, some of whom have committed egregious violations of international humanitarian law, including the mass murder of civilians, have worked at the United Nations. The insertion of criminality

into the United Nations system is nothing short of extraordinary. The accusations here are based on lengthy testimony by former RPF members in exile:

Lt General Karenzi Karake was head of DMI after the genocide and was considered one of Kagame's most willing executioners. He transformed Kami military barracks – where Hutus and disobedient Tutsis were brought - into a slaughterhouse, according to his colleagues. He helped organize the assassinations of Canadian priests and Spanish aid workers who criticized the RPF for committing crimes against peasants. He helped plane the attack on Kibeho internally displaced persons' camp in 1995 and helped mastermind the invasion of Congo in 1996. In 2007, he was appointed deputy commander of the joint African Union-UN peacekeeping force in Darfur (UNAMID), and his mandate was renewed in 2008 for a year despite an arrest warrant issued by Spain on charges of genocide, crimes against humanity and terrorism.

General Patrick Nyamvumba: He was involved in the murders of hundreds of Francophone Tutsis from Rwanda, Burundi and Congo, in addition to Hutus who tried to join the RPF before the genocide. He was involved in killing civilians in the demilitarized zone in 1993 and 1994. He was the chief commander of death squad operations in RPF-controlled areas where Hutu civilians were slaughtered. In 2009, Nyamvumba was appointed commander of UNAMID. He held the post until 2013.

General Major Jean-Bosco Kazura: He was a deputy commander under Patrick Nyamvumba, and ordered mobile forces under his control to kill Hutu civilians in the east of the country during the genocide. After July 1994, he was also involved, with Nyamvumba, in screening Hutu men from all over Rwanda, who were rounded up at night or deliberately recruited into RPF military ranks in order to be eliminated in Akagera Park. In 2013, Kazura was named commander of the UN's stabilization force in Mali, a post he held until late 2014.

Colonel Francis Mutiganda, until recently had long been a director of external intelligence for Kagame, and has been central in helping to organize assassinations of Rwandan dissidents abroad. During the genocide, he was also involved in operations that targeted Hutus for slaughter in Ndera and in Byumba. In 2011, Mutiganda was deputy chief of military planning services for UN peacekeeping at the headquarters in New York. A UN officer who worked closely with Mutiganda told me that the UN failed to properly vet the Rwandan colonel before hiring him and only became aware, after the fact, that he had allegedly directed a killing squad in Rwanda. The UN wrote an internal report on Mutiganda's criminal record following his appointment. Despite the report, the UN was ultimately unwilling to fire Mutiganda because Rwanda exerted undue influence at the United Nations as a result of its troop contributions to peacekeeping operations, the UN officer explained.

Brigadier General Innocent Kabandana has long served as Rwanda's military attaché

in Washington, despite being known as a zealous actor in RPF-led extermination campaigns of Hutus. Kabandana served as the Political Commissar of the 157th battalion that carried out mass killings of Hutu civilians in the south and central part of Rwanda in 1994. He has a direct responsibility in the assassination of both Hutu and Tutsi civilians at a novitiate in June 1994 in Gakurazo where more than a dozen clergy and other civilians were gunned down in cold blood in front of witnesses.

Francois Xavier Ngarambe currently holds a vice president position at the UN's Human Rights Council, whose secretariat is the UN Office of the High Commission for Human Rights in Geneva. Ngarambe is a long-time RPF civilian cadre. He is among the officials the RPF has used to conceal crimes. He helped turn the Tutsi survivor association IBUKA into a propaganda organization. He is also accused of convincing interior Tutsis to work with DMI and other RPF branches to fabricate testimonies against Hutus.

Christine Umutoni, a senior RPF official, is one of the regime's longest standing propagandists and ideologues. She has been a central, persuasive figure working with the RPF Secretariat in covering up the regime's crimes and creating the official genocide story that Hutus conspired years in advance to exterminate Tutsis, that the RPF stopped the genocide and the French government was complicit in the violence. Umutoni has served as the UNDP's representative in Eritrea, and is now the UNDP's representative in Mauritius and the Seychelles.

Joseph Mutaboba, a key advisor to Kagame, has also been a founding RPF ideologue who has played a critical role in shaping the official narrative of the genocide for a Western audience, and helping cover up the regime's crimes, in particular Rwanda's looting of minerals in the DRC. Mutaboba has been appointed to a number of high profile UN positions over the years: he has served as the AU and UN Joint Special Representative and deputy head of UNAMID in Darfur since 2013, and between 2009 and 2013 he was the UN Secretary General's Representative in Guinea-Bissau and Head of the United Nations peace building support office in that country (UNOGBIS). Mutaboba has worked fervently with Rwandan intelligence and the RPF Secretariat to bring false asylum seekers to Western countries, namely to Canada, Belgium, the United States, South Africa, UK and France. He's a key figure in helping provide these people with the proper documentation for asylum requests to help achieve citizenship in these countries. The objective is to infiltrate these countries with a large number of Rwandans who are loyal to the RPF regime. Some of these refugees are then expected to engage in espionage or other criminal activities abroad, such as targeting dissidents.

This is not an exhaustive list by any stretch of the imagination; there are many other examples of infiltration.

For example, **Kirabo Aisa Kacyira** has long served as deputy executive director and assistant secretary general of the UN Habitat Department. She is the wife of Brigadier General Rwakabi Kacyira, who served as a

former head of DMI and used to command the RPF's military police in Congo. The range of crimes her husband has committed for the RPF is long: When he worked at the RPF Training Wing prior to and during the genocide, he helped order the killing of Hutu recruits. After he joined DMI he assisted Karenzi Karake in organizing the killings at Kami barracks. When he was in Congo, he played a key role for intelligence enforcer Jack Nziza in stealing minerals and was actively engaged in killing operations by Rwandan forces in the DRC.

Rwandan asylum seekers have complained that Rwanda's infiltration of host governments and the UNHCR has unfairly influenced how their claims are treated, notably in Kenya, Uganda, Senegal, Malawi and Mayotte, which is a department of France in the Indian Ocean. The situation has likely recently changed in Uganda, due to toxic relations between Uganda and Rwanda

In many cases, host governments have dismissed claims for asylum or the UNHCR has refused genuine asylum seekers for resettlement, favouring those who are recruited by the RPF. The UNHCR is also known to use interpreters who work for Rwandan embassies to listen in on highly sensitive statements about why they fled Rwanda and now fear persecution. The UNHCR also has been known to hire interns who are recommended by Rwandan embassies around the world. It is a serious problem, according to asylum seekers I've spoken to.

The RPF's civilian cadres, or Intore, reporting to the RPF Secretariat and DMI, oversee Rwanda's propaganda system.

One of the most notorious RPF's propagandists and mythmakers has been Catholic Father **Privat Rutazibwa**, who worked hand-in-hand with Rakiya Omar, from the NGO African Rights. Father Rutazibwa helped among others to direct her writings, and had a substantial influence on how the official narrative of Rwanda's genocide has been historically constructed and maintained over a quarter a century.

Rakiya Omaar co-authored, with British scholar **Alex de Waal**, the defining book *Death, Despair and Defiance*—a colossal compendium of Hutu-on-Tutsi violence published just weeks after the Rwandan genocide ended. Omaar and de Waal were quintessential kingmakers in helping cement Paul Kagame's international impunity. Their 750-page creed was published in September 1994 and unveiled an immediate chargesheet of perpetrators and offered a sweeping narrative of how Hutu ideologues conceived their genocidal project against the Tutsi, years in advance.

The narrative cast the violence in Rwanda as a battle of good vs evil, claiming that only Tutsis were victims, and only Hutus were perpetrators. And most of all, African Rights depicted the RPF as saviours.

It was a compelling story, and for a time, *Death, Despair and Defiance* was considered the bible by the UN's International Criminal Tribunal for Rwanda (ICTR). Eventually African Rights ended up on the RPF payroll, working closely with intelligence operatives

and even moving to a building that housed DMI, according to Luc Reydam, an academic from Notre Dame University who investigated the NGO.

He provides evidence to show that African Rights became a RPF front organization and its account of the genocide was produced with the "full and active support of the RPF." African Rights got direction from DMI and the RPF secretariat.

Reydams has shown the degree to which African Rights was prescriptive and influential; it scolded the international community about who was morally right during the war, who should be arrested and why. It staunchly defended the RPF against reports that its troops had engaged in violence and shamed other human rights investigators and journalists for calling attention to RPF abuses.

Their book primed public opinion on the conflict and shaped the way the world saw the RPF as moral victors and Hutus as perpetrators. Their research has been absorbed and regurgitated uncritically by many scholars and human rights organizations. Human Rights Watch's seminal account of the genocide, *Leave None to Tell the Story* was published in 1999 and became the subsequent bible at the ICTR. That book cites *Death, Despair and Defiance* a record 42 times.

The dominant narrative has helped create the RPF's false moral legitimacy. It also demonized the Hutu population, was used to garner support from the international community to instil western guilt and encourage foreign donors to give aid, in

addition to steering legal proceedings against Hutu opponents.

The Akazu conspiracy theory was strongly promulgated by Human Rights Watch. This theory stipulated that a tight circle of individuals around Habyarimana wanted to wipe out the minority Tutsi in order to secure Hutu domination. A senior lawyer at the ICTR's Office of the Prosecutor called the Akazu theory and other tenets of the official genocide narrative, an urban myth. This individual also said an appropriate investigation into the killing of Habyarimana would have unraveled the whole urban myth about how the genocide occurred, why it occurred and who was responsible. The senior prosecutor admitted that there had been a malicious conspiracy (or cover up) at the ICTR, a phenomenon that explained the decision not to prosecute Kagame and his senior commanders for crimes they committed in 1994. He told me that because Kagame had command and control of his army, it meant he had direct authority over any criminal acts carried out by his troops or commandos, and therefore he would have been the ultimate indictee. But instead Kagame was protected for a variety of geopolitical reasons, not least among them, he suggested, for securing valuable minerals in Congo and providing a corridor for their removal to Western markets.

Thousands of Rwandan and Congolese people have tried to alert the international community to RPF crimes but these individuals have been intimidated, jailed, silenced or killed. At the same time, powerful interests at the United Nations and within Western governments have buried crucial

evidence and dismissed the experiences of people who fled, thereby contributing to an environment in which suspicion of an entire ethnic group has flourished and overshadowed the very foundation of enquiry. The misrepresentation of historical events has enabled a feedback loop of human rights violations that exists to this day.

The following are just a few of the alarming reports the West chose to deliberately conceal:

- At the height of the genocide, in May 1994, a UN cable revealed that Kagame's forces were shooting, stabbing and burning refugees and dumping bodies of victims in the Kagera River. Others were hauled off in trucks, according to survivors fleeing to neighbouring Tanzania.
- In September 1994, an international consultant with extensive experience in African war zones named Robert Gersony concluded, in a report tabled to the United Nations, that 40,000 Hutu refugees were slaughtered in less than one third of the country's communes he visited, and he believed the operations were systematic and amounted to [genocide](#). The UN buried his report to protect Kagame's regime. A whistleblower released it [online](#) in 2010.
- Early evidence from RPF informants indicated that on April 6, 1994, Kagame's commandos had shot down the plane carrying President Habyarimana and his Burundian

counterpart. Their assassinations triggered the Rwandan genocide, which claimed the lives of several hundred thousand Tutsis. Louise Arbour, the Canadian prosecutor of the UN's International Criminal Tribunal for Rwanda (ICTR), shut down that probe in 1997. She argued that the tribunal did not have jurisdiction to investigate the plane attack. Yet Article 4 of the ICTR Statute specifically called for the body to investigate acts of terrorism.

- A political group comprised of Rwandan Hutu refugees conducted a partial investigation in camps in Congo and Tanzania. That investigation listed the names of 20,000 victims, most from northern Rwanda, who had been killed in RPF zones by Kagame's army. **In many cases the names of witnesses to the killings were listed, and occasionally the names of the alleged killers, who were members of the RPF, were identified.** The investigation, which I got access to, was submitted to the ICTR in 2000, but the court buried the findings.
- A Rwandan human rights activist and journalist named André Sibomana collected the names of 18,000 men, women and children who were slaughtered in the prefecture of Gitarama after the RPF seized the zone in June 1994. Rwanda's former prime minister, Faustin Twagiramungu, and former interior minister, Seth Sendashonga, gave those names to

the ICTR and to Belgium in 1996. No judicial action was taken. Sendashonga was gunned down in Nairobi by Kagame's operatives in 1998. Sibomana, who devoted his life to the vulnerable and voiceless, died in 1998.

For Rwandan refugees, there has been a fundamental breach of trust in their relationship with the international community, especially with the United Nations. The question now is this: is it possible to ever restore some of that trust? Will the UN look squarely at its responsibility in failing to promote accountability in Central Africa?

Above all the United Nations needs to recognize the danger in recommending the return of refugees to a country where criminality has become a way of governing and maintaining power over people's lives, in a country whose authorities refuse to abide by the rule of law.

Until the UN takes responsibility and recognizes its historical error in judgment, there can be little hope that the safety, dignity and rights of Rwandan refugees can begin to be addressed.

協力

翻訳：名倉早都季（東京大学大学院生）

編集：石橋七都希（立教大学学部生）

写真：下村靖樹（ジャーナリスト）

統括：米川正子

報告書作成：2019年4月